日野市百草の経塚遺物

深澤　靖幸（府中市郷土の森博物館）

はじめに

江戸時代、武蔵国多摩郡百草（もぐさ）村にあった慈岳山松連寺には、今でいうところの考古資料が宝物として蔵されていた。地誌や紀行文によれば、縄文時代の石斧、古墳時代の大刀、鉄鏃、中世と思しき武器、馬具など実に多彩な資料があり、なかでも一二世紀の経塚に関わる遺物は早くから注目されてきた。

これら経塚遺物は、今となっては所在が確認できないものがあるものの、明治以降の経塚研究に相応の位置を占めてきた（高橋一九〇七など）。さらに、銅製経筒の一口が藤原守道という工人名を明記した作品として知られるようになる（林一九七五など）と、経筒製作工人を考えるうえでも注視されるようになり（網野一九八三など）、現在に至っている。

このように重要視される資料でありながら、現存遺物の考古学的な資料化は果たされることなく今日に至っている。こうしたなか、日野市郷土資料館による特別展の開催により遺物が集められ、かつ同館の労により各所蔵者・機関から許可を得られたことによって、これら現存遺物――経筒三口――をまとめて調査する機会を得た。本稿では、改めて本経塚の基礎情報を整理し、資料化した情報を開示するとともに、本経塚とそれをめぐる一二世紀の経塚造営の様相について若干の考察を行う。

なお、本経塚の名称については「松蓮（連）寺経塚」とする文献が多い（林一九七五・東京国立博物館編一九八八など）。確かに江戸時代に出土品を所蔵していたのは松連寺だが、後述するようにその成立は元禄一三年に降り、経塚とは関係しない。そのうえ、松連寺の地には真慈悲寺という鎌倉幕府の祈祷所ともなった中世寺院が存在した。経塚と真慈悲寺との関係は検討を要すが、松蓮（連）寺経塚の名称が誤解を招くことは言うまでもない。この点を考慮して、本稿では所在地名を採って「百草経塚」と呼んでおく。

一　百草経塚に関する諸情報と遺物

（一）百草経塚を取り上げた近世史料

近世の地誌、紀行文そして松連寺やこれに隣接する八幡宮の縁起類などには、百草経塚の発見や出土品に関する情報が記されている（**表1**）。地誌としては、『武蔵名勝図会』[1]（文政三年（一八二〇）成立）をは

表１　地誌・紀行文等にみる出土遺物

史料名 成立年・刊行年	発見年 出土地	出土品	備考
松連寺由来記 慶長 15年(1610)		経筒に関する記述はないが、長寛元年銘経筒にみえる弁豪・尭尊を保元・建久期の松連寺住職とする	『新編武蔵風土記稿』収録。記述内容の信憑性に疑問あり
武州多麻郡百草村桝井山正八幡宮伝紀 元禄 14年(1701)	元禄 13年	男山(石清水八幡) の土を納めた磁器、鑑(鏡)、千手観音銅像、短刀 100余、経筒(建久・長寛・永万銘)、磁器、仏具	男山の土を納めた磁器は八幡背後の出土、他は各所
松蓮寺古縁起 享保 6年(1721) 以降	正徳年中 仁王塚下	銅の経筒(長寛元年銘)、銅の経筒(永万元年銘)、金の経筒(建久 4年銘)、石瓶、観自在の像、金壺 1、銅壺 2、懐刀数 10、華皿等、古鏡・陶器の香合 3	「調布日記」「玉川披砂」収録
調布日記 文化 6年(1809)	正徳 3年 仁王塚下	銅の筒(長寛元年銘、永万元年銘)、金の筒(建久 4年銘)、古鏡、香合	発見年・出土地は「古縁起」の引用
百草松連寺什物 文化 13年(1815) 以降		経筒(長寛九年銘、永万元銘、建久四年銘)、銅鏡 2、合子 2、六器(鋺 1，托 1)、の根 4、(鉄刀 3、鍔 1、千手観音 1、鐙 1)	岩瀬文庫。長寛 9年は元年、仁治 3年は 4年の誤読
郊遊漫録 文化 12・13年 (1815・16)		経筒 3口	『江戸名所図会』の調査記録
武蔵名勝図会 文政 3年(1820)	元禄 13年 境内地	銅経筒(長寛元年銘)、銅経筒(永万元年銘、円鏡 1・陶器香合 3・雷斧 1・炷殻入陶器 1・千手観音 1)、銅経筒(建久 4年銘)、短刀 2(経筒の周囲に埋められていた数百本のうち)、千手観音・香合	挿図では経筒は二王門跡西方の丘陵上出土とし、二王塚の項では文化 14年出土とする
藁畏 文政 7年(1824)	元禄 13年 寺中	経筒(銅・長寛元年銘)、経筒(銅・永万元年銘)、経筒(金銅・建久 4年銘)、阿弥陀如来坐像、鏡、石瓶	刀２口、鍔１個は文化 13年出土
百草松連寺の記 文政 10年(1827)	元禄 13年	唐銅経筒(長寛元年銘、経文残欠)、銅筒(永万元年銘)、唐銅の筒(建久 4年銘)、素焼き 3、香合入、円鏡	
多波の土産 文政 11年(1828)		銅器(弘仁 9年銘)、銀筒(仁治 4年銘)、銅筒(長寛元年銘)、銅筒(永万元年銘)、銅筒(建久 4年銘)、七宝ナガシ銅皿、鏡	
新編武蔵風土記稿 文政 13年(1830)	元禄 13年 二王塚	銅経筒(長寛元年銘、経文残欠)、銅経筒(永万元年銘、古鏡 1・香合 1・護摩器 1組・古壺 1)、銅経筒(建久 4年銘)、短刀 2(経筒の周囲に埋められていた数百本のうち)	
松連禅寺之碑 文政 13年(1830)		銅筒 5(弘仁・長寛・永万・建久・仁治銘)	
江戸名所図会 天保 7年(1836)	正徳年間 二王塚	経筒(銅・長寛元年銘)、経筒(銅・永万元年銘)、経筒(金銅・建久 4年銘)、観音像、石瓶、刀剣数十、華皿	
海録 (1820-37)		(「藁畏」の該当部分の引用)	
往昔夜話 天保 14年(1844)		経筒 3、瓶	
皇国地誌 百草村 1879年(明治 12)	元禄 13年 元 境 内 仁 王塚付近	仏像(建長 2年銘)、経筒(唐銅経筒、長寛元年銘・永万元年銘・建久 4銘)、鏡、古刀 2、鏃、鍔 1など	
参　考			
武蔵国南多摩郡七生村百草園 (史学界 3-2) 1901年		経筒(長寛 9年銘、永万元銘、建久 4年銘、仁治 3年銘)、青銅仏像 1、古鏡 1、鏃 1、古刀 2、鍔 1七宝焼皿 1	長寛 9年は元年、仁治 3年は 4年の誤読。旧松連寺の什物は百草園内の酒家(茶店) にて保管
考古的探検旅行 (考古界 1-4) 1901年		①経筒(弘仁 9年銘)、鉄鏃。②阿弥陀坐像。③経筒(長寛元年銘、永万元年銘、建久 4年銘)	①は百草園茶店保管。弘仁 9年銘は追刻、鉄鏃を贋作とみなす。②は観音堂保管。元禄 13年松蓮寺境内出土。③は高幡金剛寺保管

じめ、『新編武蔵風土記稿』[2]（文政一三年成立）、『江戸名所図会』[3]（天保七（一八三六）刊）が百草の経塚を取り上げていて、特に前二書は写生図を交えて詳細に出土品を紹介している。

紀行文では、大田南畝の『調布日記』『玉川披砂』[4]、竹村立義の『百草松連寺の記』[5]、作者不明の『多波の土産』[6]が紹介している。このうち『調布日記』では、南畝が文化六年（一八〇九）二月に松連寺を訪れ、住僧不在であるにもかかわらず、留守を預かる僧の対応で経塚遺物を含む寺宝を拝観したことを記している。竹村は文化一〇年に本堂の傍らの棚を設けた一室で寺宝を拝観し、住僧から一つ一つつぶさに説明を受けており（『百草松連寺の記』）、文化一一年には『多波の土産』の作者も同じく寺で拝観している。加えて、経筒などの宝物を写生図で紹介した「百草松連寺什物」[7]もある。松蓮寺は多摩川の右岸の小高い丘陵上にあって、眺望の開けた景勝地であったために、江戸の文人墨客たちの訪問地となっており、宝物拝観も目的の一つとして意識されていたことがわかる。

とうぜんのことながら、松連寺の宝物は近隣でもよく知られた存在であった。やや遅れるが関戸村（多摩市）の延命寺の住職・春登が著した『藁畏（わらぐぐつ）』[8]や、多摩川対岸の本宿町小野宮（府中市）の内藤重鎮が記した『往昔夜話』[9]にも経塚遺物に関する記述を見出せる。

右に紹介したのは松連寺を訪れた地誌の調査者や江戸の文人墨客、そして近隣の知識層が残したものである。これに対して、地元の、松連寺やこれに隣接する百草八幡神社の縁起類にも、経塚発見や経塚遺物に関する記載がある。いずれも松連寺僧らによって作成されたもので、松連寺の複雑な歴史を反映してさまざまな縁起が語られているが、縁起の内容に即すならば次のように整理できると思う。

松連寺の開山を担った亀光鑑が元禄一四年（一七〇二）五月に作成したのが「武州多麻郡百草村桝井山正八幡宮伝紀」[10]（以下「伝紀」）で、源頼義が前九年の役の戦勝祈願で八幡宮を勧請したことから書き起こされている。同じく八幡宮勧請から語るものとして、「松蓮（ママ）寺古縁起」（以下「古縁起」）がある。こちらは現存しないが、大田南畝の『調布日記』や『玉川披砂』に収録されている。すでに後欠文書となっていて作成年は不明なものの、文中に享保六年（一七二一）の堂舎建立記事があるから、これ以降とわかる。松連寺は、百草村を知行した小林正利が元禄一三年五月に臨済正宗（黄檗宗）寺院として開いたことに始まるが、小林氏の改易により廃れ、無住の時期を経て、享保二年（一七一七）に小田原城主大久保忠増の室である寿昌院によって慈岳山と山号を改め再興されている。したがって、「伝紀」は桝井山松連寺、「古縁起」は慈岳山松連寺にそれぞれ関わる縁起とみられる。また、「古縁起」に近似した内容を持つものとして、成立年不詳の「武州多摩郡百艸邑舛井山松連禅寺千手観音畧縁起」[11]（以下「畧縁起」）もある。

ところが、松連寺の由緒を天平期から説き起こし、頼義による八幡宮再興へとつなげる縁起がある。『新編武蔵風土記稿』が載せる「松連寺由来記」（以下「由来記」）と、『武蔵名勝図会』が載せる「松連寺由来記并ニ本地観音堂縁起」（以下「由来記并ニ縁起」）である。「由来記」は奥書によれば慶長一五年（一六一〇）の成立、「由来記并ニ縁起」は成立年不詳だが大久保家による再興に言及しているから享保六年以降と判断できる。また、百草八幡神社境内にある、文政一三年五月建立の「松連禅寺之碑」[12]（以下「碑」）は、八代住職・魯庵の功績を顕彰する石碑だが、そこにも「由来記」に似た記載がある。

このように百草の経塚及びその遺物に触れた地誌、紀行文、縁起類は少なくない。しかし厄介なことに、これらに記された諸情報の内容は必ずしも一致しない。地誌や紀行文の記述には住僧の解説も採り入れられ

1和鏡（武蔵名勝図会）
2合子（新編武蔵風土記稿）
3合子（百草松連寺の記）
4・5合子・小壷（百草松連寺什物）
6六器（新編武蔵風土記稿）
7壷（新編武蔵風土記稿）
8〜10（百草松連寺の記）

図1　地誌等に描かれた遺物

ているのだろうが、地誌や紀行文がさまざまな縁起類を載せているように、典拠とした史料の違いによると考えられる。そして縁起類が経塚の発見譚や遺物の由来を都合よく採り入れ、創作していることでさらに複雑さを増してしまっているのである。いまとなっては確かなことは不明というほかないけれども、妥当性の高い情報を拾い上げてみよう。

（二）記録された経塚遺物

まずは、経塚遺物の内容を紹介したいが、これも史料によって記載の異なるところがあって、全容を明らかにすることは難しい。経塚遺物の主体をなす経筒の出土個数すら、実は明らかでない。確実なのは各史料が紹介し、現存する長寛元年（一一六三）銘、永万元年（一一六五）銘、建久四年（一一九三）銘で三口である。本稿ではそれぞれA・B・C号と呼んでおく。

この三口のほかにも二口の存在を記す史料がある。『多波の土産』は、右の三口に加え、弘仁九年（八一八）銘と仁治四年（一二四三）銘の二口を写生図とともに紹介し、「碑」も三口に加えて弘仁・仁治の経筒の出土を記している。これをそれぞれD・E号とする。また、明治になって水越正義は仁治三年銘経筒（水越一九〇一）、山中笑らは「考古的探検旅行」[13]（以下「旅行」）で弘仁九年銘の経筒（（記者）一九〇一）の存在を報告している。後者はD号、前者はE号相当するとみてよい。D・E号の存在に触れる史料・文献が限られる理由はともかく、かつて百草には五口の経筒が存在したことになる。これら五口の経筒については次項で改めて取り上げる。

地誌・紀行文・縁起類には経筒ばかりでなく、さまざまな遺物が掲載されている。現存しないものばかりなので判断は難しいが、「往昔夜話」が「近頃ハさまくの寺宝多く成候様ニ被思候」と述べているように、寺の歴史を語るために揃えられた胡散臭い品物も少なくない。ひとまず、経塚遺物の品目として違和感がないのは、和鏡、香合、護摩器、壷、短刀、鉄鏃だろうか。**図1**に主な写生図をまとめた。

和鏡は比較的写実的な写生図が各書に載る。とりわけ『武蔵名勝図会』では拓影の模写を載せていて、菊花座鈕をもつ秋草蝶鳥鏡と判断できる。

一二世紀前半の製品とみてよい。香合の類は『新編武蔵風土記稿』や『百草松連寺の記』の写生図を見る限り複数あり、白磁あるいは青白磁の合子や小壷であった可能性が高い。護摩器は鉢とその蓋、托からなる銅製のいわゆる六器である。以上は、経塚遺物としてふさわしい。焼き物の壷の類は複数存在したようである。『新編武蔵風土記稿』は胴部に若干の膨らみがある一口、『百草松連寺の記』はいずれも素焼きの寸胴形一口と壺型二口の写生図を載せている。『新編武蔵風土記稿』『百草松連寺の記』ともに写実性は定かでないし、『百草松連寺の記』の三口は記載された寸法に疑問がないわけではないが、経筒外容器の可能性があろう。特に寸胴形の一口は渥美窯の外容器とみられなくもない。短刀も、経筒の周囲に埋められていたという『新編武蔵風土記稿』の記述に信を置けば、避邪を意識した経塚副納品とみてよい。

しかし、鉄鏃は古墳時代後期や近世のものを含んでいるようで、明確に中世に属すものはなさそうである。この点と、後に触れる古墳時代後期の鉄刀の存在を踏まえると、短刀も経塚遺物とみなすことに躊躇しないわけではない。

このほか、千手観音像もある。千手観音像は「一寸二分」で『武蔵名勝図会』はC号経筒の中に入っていたものと伝える。小仏像は経塚の副納品としてよく知られ、地元にこの千手観音と伝えられる小金銅仏が残されてもいる。ただ、現存する小金銅仏は八本の手を持つ弁財天坐像である。千手観音像は写生図がないため同一である保証はない。尊容を誤認した可能性もあろう。もっともこの坐像を一二世紀の製作とするのには無理があり、C号経筒に伴うという記載を信じるわけにはいかない。

また、『多波の土産』と『百草松連寺什物』は源義家所用と伝える鐙を紹介している。写生図によれば中世の遺品とみて違和感はないが、経塚に伴うものではないだろう。

（二）経筒

前述の通り、経筒は五口存在したようである。現存するA～C号の三口は、今回、実測などの資料化を行った。D・E号の二口は所在不明だが、『多波の土産』の写生図とその註記により、基礎情報が得られる。

A号経筒

A号（長寛元年銘）経筒は奈良国立博物館の所蔵品である（**図2・3**）。筒身、蓋ともに銅板製で、表面は漆黒を呈しているが、表面には鍍金の痕跡がある。

筒身は高さ二七・四㌢、口径一四・〇㌢、底径一三・八㌢で、〇〇・八㌢前後の均一な厚さの二枚の銅板を湾曲させて、合わせ目を鋲留めしている。鋲の頭と先端は丁寧に潰されていて、視認できないところもあるが、それぞれ六か所を留めているようである。底には円筒の内径にあわせて製作された厚さ一㍉の円板を落とし込んでいる。林宏一は底板の四方に爪を作り出していると報告している（林一九七五）。筒身口縁の下一㌢の位置には、銅製金具一対を装着している。これは、棒状の突起を持つ、一・一×一・一㌢前後の舌状の金具で、筒身に穿った小孔に突起部を挿入して、鋲留めと同じく先端を潰して固定している。舌状の部分には、〇・三×〇・五㌢の孔がある。

蓋は高さ二・七五㌢、径一四・一㌢である。やはり〇〇・八㌢前後の厚さの銅板から打ち出されたもので、中央部を山形に盛りあげた盛蓋の形式で、筒身に被さる。蓋の口縁には〇・二×〇・三㌢前後の舌状の張出しが造り出されていて、孔が穿たれている。これは、筒身に付けられた舌状の金具に対応する位置にあり、両者の孔に紐ないしは針金を通して筒身と蓋を緊縛するためのものと理解される。ただし、その一方は孔の部分で欠失している。筒身に蓋を被せた総高は二九・八㌢である。

筒身には次の銘がある。

（筒身）

奉納　　妙法書寫

妙法蓮華経

長寛元年大歳癸未十月十三日甲午

工匠藤原守道

大勧進聖人僧弁豪

結縁者

僧玄久　　僧觀賢

僧定圓

僧陽久

僧定阿

僧尭尊

僧弁意

駈仕僧藥西

主銘文は鏨による陰刻である。その筆法は流麗だが、字配りを誤ったらしく、筒身を一周しても収まらず、冒頭と末尾が上下に重複する位置にある。

また、主銘文の間には一四文字の梵字が配置されている。「妙法蓮華経」に続く位置には、ह्रः（バク・釈迦）・हुँ（ウン・阿閦）・त्रां（ユウ・弥勒）・त्रीँ（ア・大日）・त्रां（マン・文殊）の五仏、結縁者

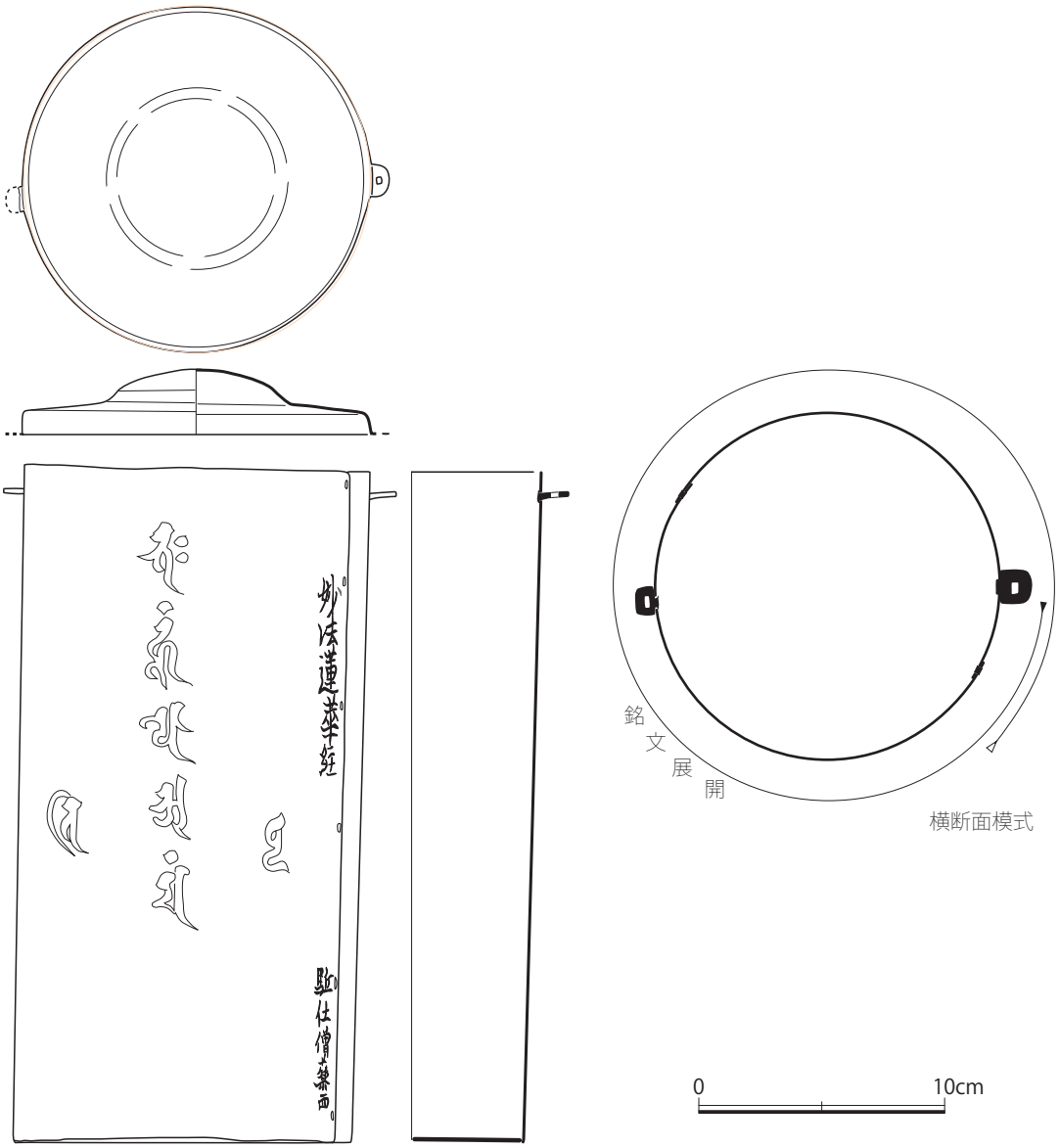

図２　Ａ号経筒（長寛元年銘）

名の上部には（キャ・空）・（カン・風）・（ラン・火）・（バン・水）・（ア・地）の五輪がそれぞれ一行で表され、その左右に（ヂリ）・（ビ）、（ビ）・（バイ）を配する。ヂリ（持国天）・ビ（広目天）・ビー（増長天）・バイ（多聞天）の四天王とすべきところを、一文字誤ったものと考えられる。なお、実測図では表現できていないが、梵字はすべて繊細な蹴彫で籠字にされている。「旅行」の記者はこの梵字を追刻とみなしているけれども、原銘とすることに配置、筆法ともに問題はない。

なお、「百草松連寺の記」や『新編武蔵風土記稿』は経文残欠の存在を記している。

また、林宏一によれば、本経筒には古い桐箱が付属し、蓋裏に「長寛之年号有之、法華奉納銅筒」、箱側面に「長寛元年之彫字有之、願主弁豪、法華経、元禄十三年辰三月、二王塚抔掘出」の添書きがあると報告している（林一九七五）。この記述は、後に紹介する『武蔵名勝図会』の内容と一致する。

B号経筒

B号経筒も奈良国立博物館の所蔵品である（**図4**）。蓋を伴い、ともに銅板製である。蓋・筒身ともに鍍金の痕跡は認められず、緑青で覆われ、錆により荒れた部分もある。

筒身は高さ二二・〇センチ、口径一一・八センチ、底径一二・一センチで、〇〇・八センチ前後の均一な厚さの銅板三枚を鋲留めしている。鋲は、それぞれ六・六・八か所を留めている。しかし、その位置は等間隔ではない。底板は径一一・八センチ、厚さ一ミリの円板を入れ込んでいる。筒身の口縁端部は、蓋を被せるためにわずかに内傾している。また、口縁の下〇・七センチの位置にはA号と同様の舌状の銅製金具が付いている。〇・四×〇・五センチの孔があけられた一・二×〇・七五センチの金具で、装着の手法もA号と同じである。

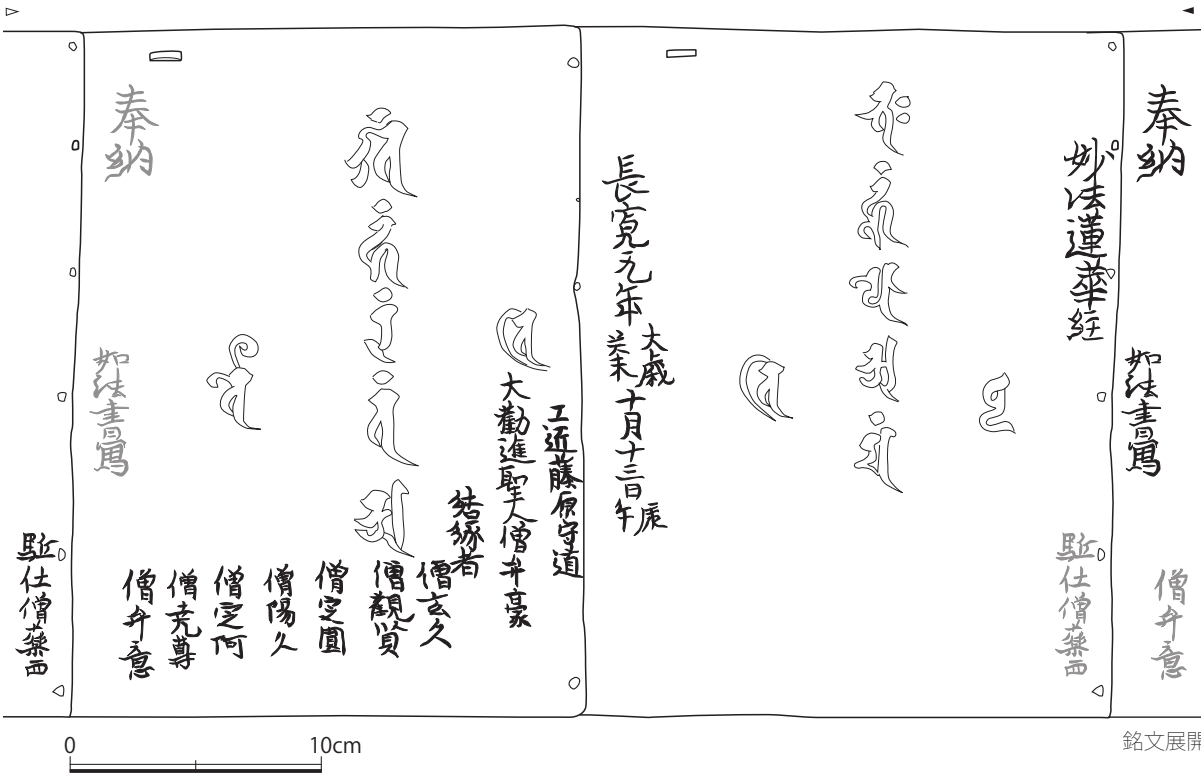

図3　A号経筒展開図

この金具は一つしか残らないが、おおむね対面に相当する位置に、鋲留めした残欠があり、本来一対装着されていたことがわかる。

蓋は、高さ一・二チセン、径一二・一チセンで、天井がわずかに膨らんだ被せ蓋である。厚さは〇〇・八チセン前後である。A号と同じく、蓋本体の銅板から一・二×〇・四五チセン前後の舌状の張出しが造り出されていて、そこに孔が穿たれている。この突起は、筒身の舌状金具に対応する位置にあり、やはり筒身と蓋を緊縛するためのものと理解される。筒身に蓋を被せた総高は二二・六チセンである。

銘は、筒身と蓋裏に刻まれている。

（筒身）

勧進

僧尭尊

大壇主藤原民（氏）　高橋貞列

永萬元年九月十七日癸亥

（蓋裏）

「大勧進所百草村

松連寺」

このうち、「藤原民」の刻銘は、「民氏」「民□」と翻刻したものを目にするがこれは誤りである。「民」は「氏」の異体字と理解し、藤原氏を意図した刻銘と考えるべきだろう。また、「癸亥ヵ」は、従来、一字目の「天」のみを翻刻してきたが、「天」の上に癸の異体字の一・二画があり、その下に亠（ナベブタ）を確認できる。永万元年九月十七日は癸亥であり齟齬はない。

これら筒身の銘に対して、蓋裏の「大勧進所百草村／松連寺」

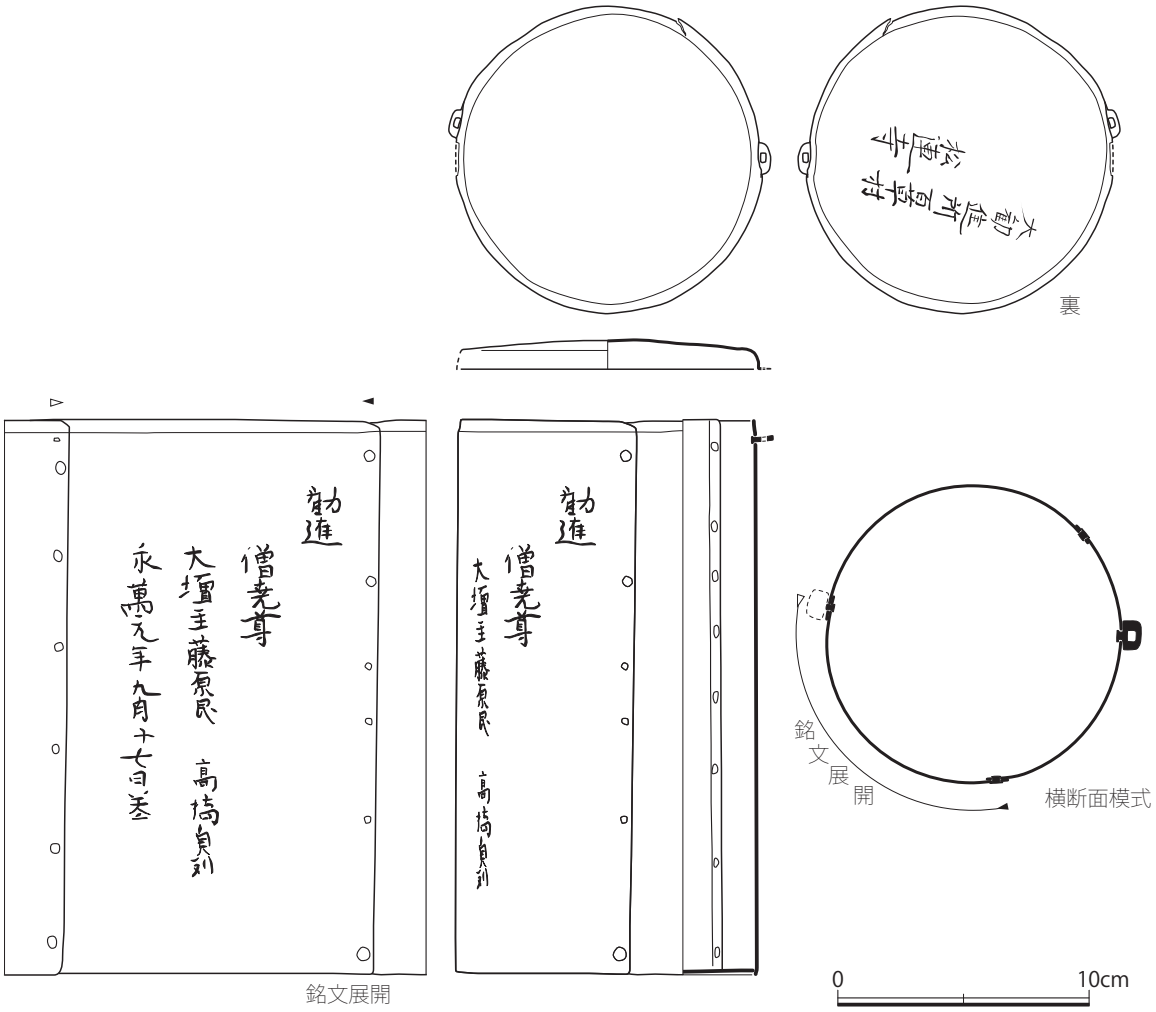

図４　Ｂ号経筒（永万元年銘）

の刻銘は浅く、筆者（刻銘者）は異なるとみてよい。筒身と蓋に共通する「勧進」の文字を比較しても、書体は明らかに異なり、錆化の状態も異なる。この点は早く「旅行」の記者が指摘しているほか、これを追認する見解が提出されている（谷一九七五）。また、上述の通り、松連寺の開山は元禄一三年であり、「百草村」の呼称が中世に遡るとも考えにくい。この蓋裏銘は偽銘と判断される。

C号経筒

C号は奈良国立博物館寄託資料（**図5**）。筒身、蓋ともに銅鋳製である。

筒身は高さ一五・一チセン、口径八・五チセン、底径九・五チセンで、底から上方に向かうに従いわずかにすぼまり、口縁部は蓋を受けるため受口となっている。製作技法は、筒身部と底部を一度に鋳造した一鋳式で、器厚は〇・三チセン前後である。外底部の中央にある長さ三・九チセン、幅〇・三～四チセンの〇・一チセンほどの突起が湯口の痕跡で、その端部には鑢目が残っている。筒身外面の中程の高さには竹の節のような一条の突線が一周するが、内面にはこれに対応する突起や窪みは認められない。こうした所見からすると、鋳型の内型は一体だが、外型は上下に二分されたものであったと判断できる。また、口縁から三チセンほど下位には、外型を整形する際に挽板を回転させた筋目が確認できる。なお、筒身内面には経巻の残欠とみられる紙片が今も付着している。

蓋は、高さ一・二チセン、径九・七チセンの平蓋に、高さ一・五チセンの宝珠形の摘みが付けた被せ蓋である。摘みは別鋳したものを接着している。現状では、蓋は筒身に完全には被さらな

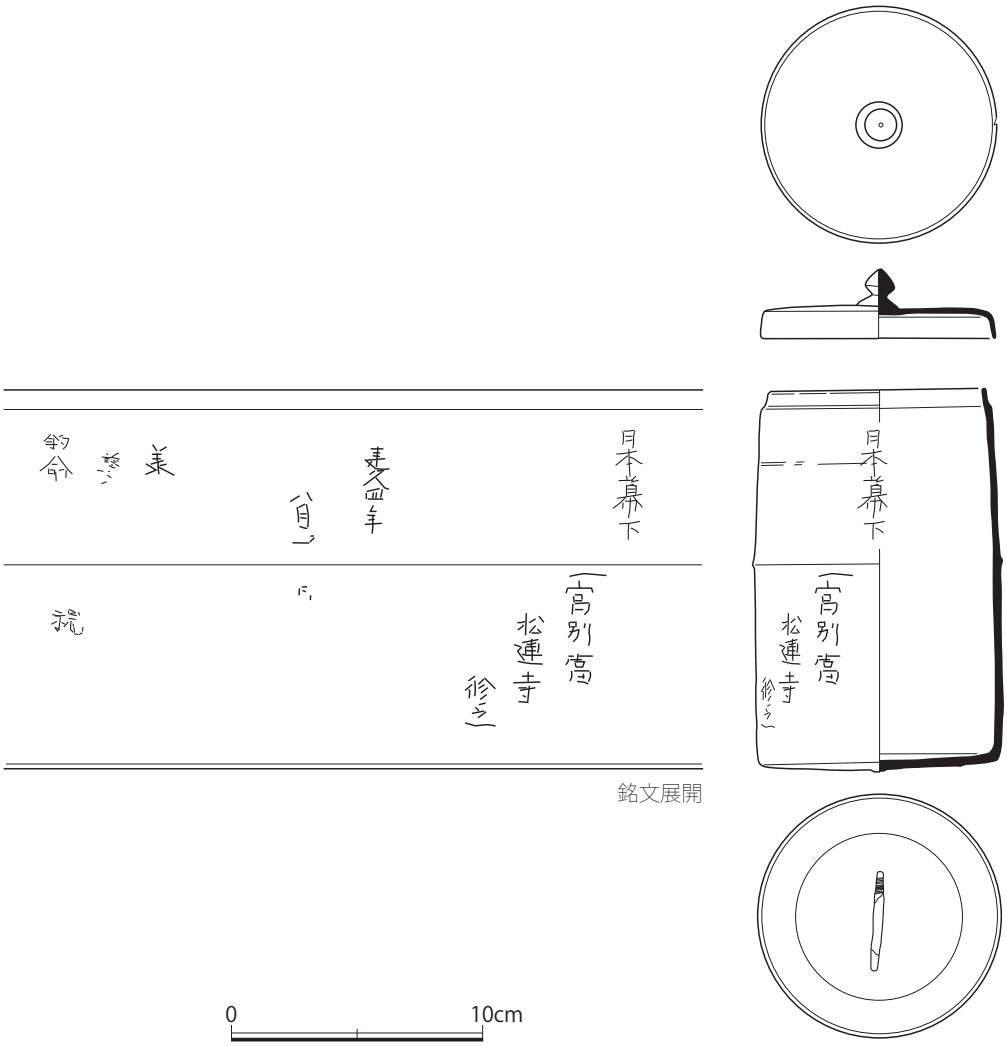

図5　C号経筒

いが、銅質や錆化の状態から、筒身に伴うことは間違いなく、総高は一七・四センチ前後と推定される。

筒身には「日本幕下」に始まる銘が刻まれている。

（筒身）

「日本幕下

一宮別当

松連寺

修之

建久四年

八月四ヵ日

承

□□

祝

鈞命」

このうち、「松連寺」は、B号の蓋裏の銘と同じく、中世には存在しない寺名である。加えて「一宮別当／松連寺」と「日本幕下」以下の全銘文の線刻は、直線的で稚拙な点で共通する。「一宮別当／松連寺」のみを追刻とする見解もある（谷一九七五）が、「旅行」の記者は全文が偽銘であることを早くに指摘している。表面の錆を切る線刻が観察される点も、刻銘が新しいことを示し、全てを偽銘とするのが妥当だろう。なお、C号の直線的な線刻銘は、重複するような線刻があるばかりか、躊躇いのような刻みもある。湾曲した筒身に刻む方が難しいとはいえ、B号蓋裏の偽銘よりもはるかに稚拙である。記銘内容は近似しているけれども、別人による追刻と推測する。

このような偽銘が刻まれているとすれば、経筒そのものの真贋も問われるが、一鋳式経筒は一二世紀の東日本に特徴的にみられる技法・形態である（村木二〇〇三など）。また、一鋳式で、筒身中程に節のような突起を巡らすものも、福島県米山寺経塚出土品（東京国立博物館編一九八八）、茨城県門毛経塚出土品（阿久津一九八五）や長野県北日名経塚出土品（東京国立博物館編二〇一七）、同県経ヶ峯経塚出土品（森嶋一九八一）、新潟県大沢経塚出土品を見出せる。さらに、筒身の下半に突起を巡らすものとして、埼玉県利仁神社経塚出土品（水口二〇〇九）や出土地不明慶応義塾大学所蔵品センチュリー赤尾コレクション（村木二〇一五）が知られている。これらは、上下に二分された外型を用いたものと判断され、門毛経塚出土品は無銘だが伴出遺物から一二世紀後半と推定され、米山寺経塚出土品は陶製外容器に承安元年（一一七一）銘があり、経ヶ峯経塚出土品は承安二年（一一七二）銘、北日名経塚出土品は保元二年（一一五七）銘、利仁神社経塚出土品は建久七年（一一九六）銘を確認できる。こうした類例を参考にすれば、分布は散在的だが、これらが一二世紀後半の東日本に特徴的な作例であることは明らかである。C号は一二世紀後半に東日本で製作された経筒に、後世、偽銘が刻まれたものと判断する。

D号経筒

D号は、『多波の土産』に写生図（**図6**）があり、形状、寸法、銘文などを知ることができる。銅製というが、銅鋳製か銅板製かは判断できない。ただし、同書の写生図はA・B号と次に紹介するE号の経筒では輪郭を線描したうえで、薄墨で陰影をつけているのに対して、C号とD号は輪郭を線描したうえで、器面に点描を施している。A・B・C号のうち、A・B号は銅板製、C号は銅鋳製であるから、D号の描写は銅鋳製であることを示しているのかもしれない。

この点はともかく、『多波の土産』は、蓋を伴う経筒を描いている。筒身の高さは「壱尺程」、口径は「三寸五分」と注記があって、百草経

塚では最大の高さを有することになるが、本書の寸法記載は現存するA・B・C号ともに一致しないので、参考にとどめておくべきだろう。注目されるのは、筒身の口縁に一対の「クワン」が描かれている点である。針金を丸く曲げたような描写からすると、環状の金具なのだろう。実は本書では、舌状の留め金具を持つA号の口縁にも小さな環状の突起らしきものが描かれている。大きさと形状は異なるが、D号にも蓋を緊縛するための金具が付けられていたと考えてよいだろう。また、「此筒ハすべてハダニルリノ玉大イニ有、底ニ二分程ノルリ色ノ玉アリ、いたって光リ有、文字形切彫リ、誠との古物也、千年ハ□十逢の如し」の注記も

図６　『多波の土産』所載のＤ・Ｅ号経筒

ある。器面にあるという瑠璃の玉は理解に苦しむものの、C号経筒の筒身内壁には球状の光沢のある錆を確認できるから、同様の錆が瑠璃の玉と表現されたと推測することは可能である。この点も、D号が銅鋳製であったことを示唆しているのではないだろうか。ともあれ、D号を経筒とみることに違和感はない。

しかし、その筒身には「弘仁九年酉二月／大勧進所」の銘があるという。いうまでもなく、経塚の造営は一〇世紀末以降のことであるから、弘仁九年（八一八）銘はあり得ない。「大勧進所」の銘がB号蓋裏銘と共通するのだから、やはり銘文は偽名と判断すべきである。現存しないため明らかにできない点は多いが、D号は一二世紀頃の経筒に追刻されたものと考えておきたい。

なお、「旅行」の参加者たちもこの経筒を観察していて、記者は「経筒は、全く土中出現のものに相違なきも、弘仁九年丁酉二月大勧進所の十二字を細く二重に追刻」していると述べている。

E号経筒

E号も、写生図により形状、寸法、銘文などを知ることができる（図6）。銀製で、「八葉」座を持つ摘みを付けた蓋を伴う経筒である。筒身は高さ「六寸五分」、口径「二寸」であるから、かなり細身である。筒身には「奉納／仁治二年大中夕三月四日／信心施主□元（方）阿弥陀佛／願主聖人祐氏□白」と判読できる銘がある。

俄に信じがたいのは、銀製という材質である。推測されるのは、錫の含有量の多い銅鋳製であろうか。百草経塚に近い八王子市白山神社経塚出土の一口は、銅鋳製でありながら、その筒身は轆轤できわめて薄く削られ、その表面は銀色の輝きを残している（深澤二〇一五）。このように銀色に見えるものを銀製と誤認した可能性がある。また、八葉座の摘みを持つ蓋も東国では稀なものの、静岡県三明寺経塚出土品のように例

がないわけではない。材質はともかくとして、E号を経筒とみなすことに問題はなかろう。想像に過ぎないが、製作地は東国ではなく、京の周辺ではなかろうか。

次に銘文をみよう。筒身銘のうち、「大中夕」は仁治四年（一二四三）の干支である「癸卯」、文末の「□白」は「敬白」と推測する。一三世紀前半は経塚造営の盛期は過ぎているとはいえ、あり得ない年代ではない。ただ、経筒に一次的に伴うか、つまり原銘とみなしてよいかの判断は難しい。

こうした不安材料を踏まえつつ、本経筒の年代は一二世紀後半～一三世紀前半と幅広く捉えておきたい。

以上みたように、かつて松連寺には、現存する三口と今は亡き二口、計五口の経筒が所蔵されていた。紀年銘及び経筒の形態・製作技法から、一二世紀後半に位置付けられる経筒が多く、一口（E号）については一三世紀前半に降る可能性もあった。いずれにしても、経塚は継続的に造営されたといえよう[14]。

（三）経塚の発見

右にみた経塚遺物の発見に関する諸情報は、地誌や紀行文そして縁起の記載が頼りである。しかしその記載には異同が少なくない。

まずは、ほとんどの史料が取り上げるA～C号経筒とこれに伴う遺物の出土年と出土地から俎上にのせてみよう。

出土年については、元禄一三年（一七〇〇）と、正徳年間（一七一一～一六）の二説がある[15]。この違いは、「伝紀」（元禄一三年説）と「古縁起」（正徳年間説）のどちらを典拠にしたかによるようだ。しかし、元禄一四年成立の「伝紀」に経筒などの発見が明記されている以上、正徳年間説は退けられると思う。とはいえ、「伝紀」も単に縁起を制作するうえで都合の良い年を選んでいる可能性を捨てきれず、正確な情報を伝えている保証はない。ひとまず、発見の年は元禄一四年の「伝紀」成立以前とみておく。

出土地については、「伝紀」は、作者である亀光鑑の「夢ニ随ヒ気ニ随ヒテ此ヲ穿チ彼ヲ掘」った結果、最初に神社の背後で石清水八幡の土を納めた磁器を掘り出し、その後、鏡、千手観音像、短刀、経筒、磁器・仏具などを得たと記している。つまり、磁器以外の出土地は神社背後以外の地点とも読めるのである。

そして、多くの地誌、紀行文、縁起類は、二王塚出土としている。なかでも『武蔵名勝図会』は、松連寺を描いた鳥瞰図（**図7**）に、「銅筒モ此所ヨリ堀出ス」の文字を二王門跡西方の丘陵尾根上に書き入れていて、具体的な場所を示してくれている。そればかりか、三月一二日と発見の月日を明記する。このほかにも、元禄一三年二月二三日には村内荒原の塚から鉄刀、鉄鍔、鉄鏃[16]、同一四年春には再び二王塚から鉄鏃、玉、轡、武具、同一五年八月四日には境内西側で古瓦、木像が出土したことを伝えている。前述の鳥瞰図には、建長の阿弥陀如来坐像、鉄刀の出土地も明記されている。この詳細な記述からすると、拠るべき記録が存在したと考えてよいのではないだろうか。また、『武蔵名勝図会』によれば元禄一三～一四年にかけて都合三度にわたって発掘品を得ているが、これは「此ヲ穿チ彼ヲ掘」ったという「伝紀」の記述に符号するとみることも可能である。

以上を勘案すると、百草経塚の発見に関する諸情報は、『武蔵名勝図会』の記載に一定の信を置くことが許されよう。経塚の発見は元禄一三年、二王塚であったと判断したい。

なお「伝紀」は、亀光鑑が神意によって松連寺に移住し、霊夢に従っ

て発掘した結果、さまざまな宝物を得たのだと述べている。この点は荒唐無稽だが、寺院開創を間近に控え、開発行為が繰り返されていたことを推測させる。

ところで、諸史料のなかで最も古い年紀を持つのは「由来記」である。実は、「由来記」は経塚の発見にも経塚遺物の存在にも言及していないのだが、経筒銘や百草八幡神社所蔵の建久二年阿弥陀如来坐像銘にみえる僧侶を松連寺住職として掲げている。とすれば、少なくとも経筒の一口（A号）は慶長一五年以前に出土していた可能性が生じる。しかしながら、「由来記」を収録した『新編武蔵風土記稿』ですら、この点には触れていない。近年、この記述をもとに、松連寺は中世に存在したと判断し、真慈悲寺の塔頭の一つであったとする見解もある（上野二〇一〇）が、経筒銘や造像銘にみえる僧侶と「由来記」の住職の一致は、むしろ経筒銘や造像銘を利用して創作された縁起であることを推測させる。「伝紀」や「縁起」がともに前九年の役の戦勝祈願より説き起こすのに対して、「由来記」が天平期の建立を付加している点も、かえって成立の新しさを物語っていると思う。また、同じく天平期の創立を説く「碑」の建立が文政一三年に降る点も、この考えを支持しよう。「由来記」の成立年については慎重になるべきであり、慶長一五年以前の出土は退けてよいと思う。

さて、少なくともA～C号経筒をはじめとする経塚遺物は、「二王塚」の出土と判断した。この二王塚は武蔵国多摩郡小宮領百草村の小名「二王塚」として確認できる。百草村は東京都日野市百草にその名を残し、東流する多摩川の右岸にあり、その支流である大栗川との合流点を控え、両河川に挟まれた百草丘陵に形成された村である。そして「二王塚」は、『武蔵名勝図会』の鳥瞰図によれば、松連寺や百草八幡神社のある谷の出口近くの丘陵頂部に所在することがわかる（**図7**）。元禄二年の「百

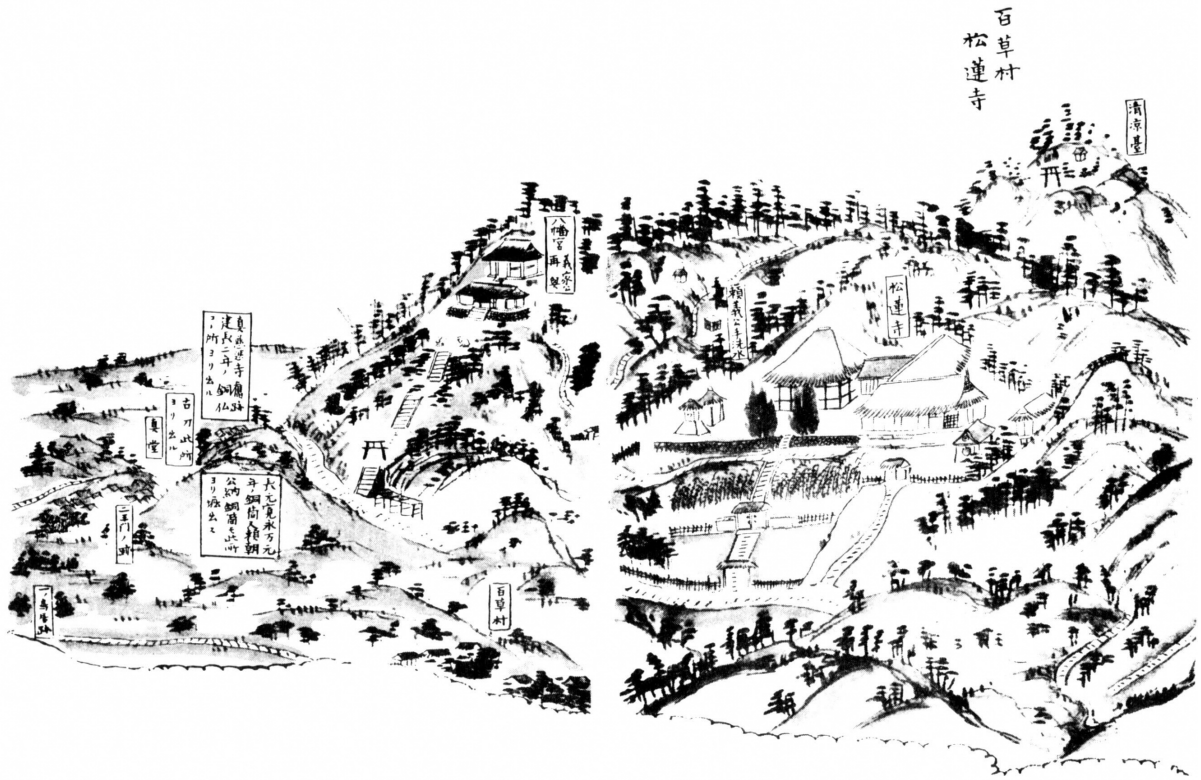

図７　『武蔵名勝図会』に描かれた松連寺

草村田畑屋敷検地帳」でも「仁王塚」として確認でき（峰岸一九九六）、中世にさかのぼる地名の可能性は高く、仁王門の存在に因むと推測される。また、『武蔵名勝図会』は「左右に塚あり」と二基の塚が存在したことを記し、『皇国地誌』（日野市史編さん委員会編一九九一）では二基の塚は六間を隔てていて、ともに高さ六尺、周囲一二間であったというから、かなりの規模の塚が存在したようである。近代には字「ニオウヅカ」として継承され、松連寺から東へ延びる真堂が谷戸の北側の尾根の突端にあたることは間違いない。百草丘陵東端の高まりにあたり、標高約九七㍍、丘陵下は約五七㍍であるから、その比高は四〇㍍である。

なお、日野市では、経塚推定地を仁王塚、これを含む旧松連寺境内、百草八幡神社境内に及ぶ百草丘陵の広い範囲を仁王塚遺跡として遺跡地図に搭載している。仁王塚遺跡は一部で宅地化が進むものの、仁王塚を含む南東部が東電学園[17]の敷地となっているとともに日野市の緑地保全重点地区に指定され、遺跡の大半は保護されている。ただ、塚の存在が推定される丘陵の頂部はすでに削平されている。

日野市教育委員会では二〇一五年に経塚遺構の探査を行い、大栗川を望む南東向きの緩斜面で人頭大の河原石の集積を発掘している（日野市郷土資料館二〇一七）。残念ながら、経塚遺物はもちろん、年代を示唆する遺物の出土にも恵まれなかったため断定はできないものの、状況的に経筒を埋納した石室の残骸の可能性が高い。仁王塚での経筒の出土を裏付ける成果といってよいと思う。

続いて、D・E号経筒を取り上げてみよう。『多波の土産』には発見に関する情報の記載はなく、「碑」も五口の経筒が出土したことを伝えるのみで、出土地点は不明というほかない。発見年についても詳らかにしえないが、同書の成立からすると、文政一一年八月には出土していたことが確実である。その一方、同書以外に近世の記録がないことからすると、発見の経緯や所蔵者がA・B・C号の三口とは異なっていた可能性があると思う。もっとも、『江戸名所図会』の多摩地方の調査記録である『郊遊漫録』によれば、斎藤幸孝は経筒などの宝物を実見していない。『新編武蔵風土記稿』の多摩郡域の調査開始は文化一一年、『武蔵名勝図会』も同時であるから、『多波の土産』の成立との差はないといってよい。それどころか、一八七九年（明治一二）成立の百草村の『皇国地誌』にも、A・B・C号の三口しか取り上げられていない。地誌の調査者や紀行文の作者は、D・E号経筒に不審な点を見出し敢えて記載しなかったか、あるいは偽物扱いされることがあって、所蔵者自らが展覧を控えたと考えることもできるが、判断しかねる。

なお、明治期に入ると、経塚研究も次第に軌道に乗る（高橋一九〇七など）。こうした動きと前後して、考古学的な調査や、遺物の観察記録も残されるようになる。百草経塚出土の経筒に関しては、一九〇一年に刊行された水越正義の紹介を嚆矢とし（水越一九〇一）、これを受けた見学記「考古的探検旅行」（記者）一九〇一）がある。「旅行」の筆者は「記者」とのみあって不明だが、中山笑のほか、根岸武香、和田千吉など錚々たる顔ぶれが同行していて、経筒とその銘文に関して、さまざまな議論が行われたようである。

また、水越は、A～C・E号の四口を松連寺廃寺後に開設された百草園の茶店で実見している。ところが、「旅行」の参加者たちはA～C号を高幡山金剛寺、D号を廃寺近くの茶店で見学している。同じ一九〇一年の探訪だが、わずかな間にA～C号の三口は所在が変わっているのである。結果的に、金剛寺に移された三口は現存し、D・E号の二口は所在不明となってしまう。

（四）偽銘の契機

経塚の造営に直結する課題ではないが、付言しておきたいことがある。経筒に認められた偽銘がいつ、どのような契機で行われたということである。五口の経筒のうち、B号の蓋とC号の筒身には偽銘が認められ、現在存在を確認できないD号の筒身銘は明らかな偽銘であった。

まず、C号の偽銘のうち、筒身の「日本幕下」銘は、元禄一四年作成の「伝紀」にすでに見えるから、少なくともC号筒身の偽銘は発掘後すぐさま行われていると判断できる。また、「日本幕下」は頼朝を指す右幕下を意識した用語とみられるから、頼朝との由緒を語るために刻まれたのであり、伝記の記述内容からしてその制作と密接に関係して行われたと推測される。

次に、B号蓋の「百草村大勧進所松連寺」、C号筒身の「一宮別当松連寺」の偽銘のうち、「松連寺」は両者に共通する。すでに述べたとおり、筆者は異なるとみるべきだが、ともに松連寺が開山された元禄一三年以降の刻銘である。

現存しないD号の偽銘は、書体を参考にできない憾みがあるが、本邦最古の経塚造営をさかのぼる「弘仁九年」という年紀を刻んでいる点が手掛かりになる。「伝紀」は八幡宮の由緒を源頼義によって勧請された康平五年（一〇六一）に、「縁起」は八幡宮と松連寺の由緒を同じく康平五年に求めている。ところが「由来記」のみが松連寺の草創を聖武朝から説き起こしているのである。すでに述べたとおり、慶長一五年という「由来記」の成立には疑問があり、記述内容からすれば「縁起」の成立より遅れると推測される。したがって、D号の偽銘は、「由来記」制作と関連するか、あるいはこれよりも遅れてなされたと推測されよう。

ところで、百草には、このほかにも改竄された資料がある。『百草松連寺の記』によれば、松連寺には文化一二年に出土した「大同二年」「天長二」「仁和二年十一月日」の銘がある三基の板碑が所蔵されていた。類似した記載は『武蔵名勝図会』にもあり、こちらでは元禄一五年、台風で倒れた古松の根元より、「大同二年」と「〇永二年八月」の碑が見つかったという。武蔵型板碑の出現は一三世紀前葉のことであるから、大同二年（八〇七）、天長二年（八二五）、仁和三年（八八七）に板碑が存在するわけがない。

板碑そのものの捏造すら想定しうるところであったが、一九九一年、このうちの一基が発見されている。松連寺跡に相当する京王百草園内の発掘調査の際に、松連庵と呼ばれる建物の床下から見出された板碑八基のうちの一基に「仁和二年十一月日」の銘が確認されたのである。もちろん最古の紀年銘板碑が発見されたわけではなく、「仁和」の銘は「正和」を改刻したものであることが明らかにされている（日野市遺跡調査会編一九九三）。つまり、松連寺で所蔵していた、とてつもなく古い紀年銘を持つという板碑は、中世の板碑を改竄したものであることが明らかにされたのである。

とうぜんのことながら、この改竄は松連寺の歴史をより古くみせようとする作為だから、その主体が松連寺であることは疑いようがない。これら板碑もまた、D号の偽銘と同じく、「由来記」の制作に伴うか、これに遅れてなされた改竄と推測されよう[18]。

二　百草経塚の検討

（一）百草経塚の位置付け

ここまで現存三口と、今は亡き二口の経筒などを紹介してきた。一部の経筒には偽銘もあって単純ではないが、五口の経筒はいずれも一二世

武蔵国内でこれまでに発見された一二世紀から一三世紀の経塚は一五か所あり、三二口の金属製経筒と瓦製経筒が確認されている（**図８**）。紀年銘を持つものでは埼玉県平沢寺経塚が最古で、一二世紀後半代のものが圧倒的に多い。無紀年銘の場合も伴出遺物からするとこの年代に収まるものがほとんどと考えられる。一瞥して明らかなように、経筒の大きさは高さ一五～二三チセンのものが多く、二五チセンを超す大型品は稀である。

現存三口に加えて、失われた二口もおおよその寸法を知ることができる百草経塚では、百草Ａ号が二五チセンを超え、Ｅ号もその可能性があり、武蔵においては最大級の経筒である。相応の埋経供養が行われたと推測される。

経塚の優位性は、現存しないとはいえ、和鏡、白磁合子、六器、短刀が副納されていた点にも表れている。いずれも経塚に通有の副納品であり、それは東国そして武蔵でも例外ではないが、至近にある龍見寺裏経塚（八王子市）や落合経塚（多摩市）は近年の発掘調査によって発見されたにもかかわらず副納品は一切なかった。同じく発掘調査で発見された大丸経塚（稲城市）の場合も、和鏡一面を出土したにすぎない。百草経塚は豊かな副納品をもつといってよい。

副納品のなかでとくに注目したいのは、多数の短刀である。『新編武蔵風土記稿』は、この時点ですでに短刀は二口しか残されていなかったが、「コノ古刀ハ経筒ノメクリニタテヽ埋メアリシト云、ハシメ掘出セシ時ハソノ数百アリシカ」と記している。本数に誇張があるとしても、経筒の周囲に短刀を立て並べるという状況は経典を護持する強い意識をうかがわせ興味深い。また、外容器と思しき陶器も出土しているようである。ここにも百草経塚の高い優位性を看取できると思う。

供養の場の規模についても触れておきたい。百草経塚では都合五口の紀後半を前後する製品と判断した。これら経筒を中心に経塚遺物を改めて検討したい。

まずは、武蔵や東国の経塚遺物との対比から百草経塚の位置を探ってみよう。

経塚の造営には様々な作法があり、当然のことながら相応の費用を要したはずである。経筒に収められた経典は、法華経八巻が一般的で、これに観普賢経と無量義経を合わせた一〇巻の場合もあったとはいえ、ボリュウームは大きく変わらない。しかし、料紙の大きさはそれぞれであり、それは経筒の大きさ（高さ）を規定した。したがって、大きな経筒は、経筒の製作費用のみならず、そこに収められた経典のグレードをも、ある程度反映していると推測される。

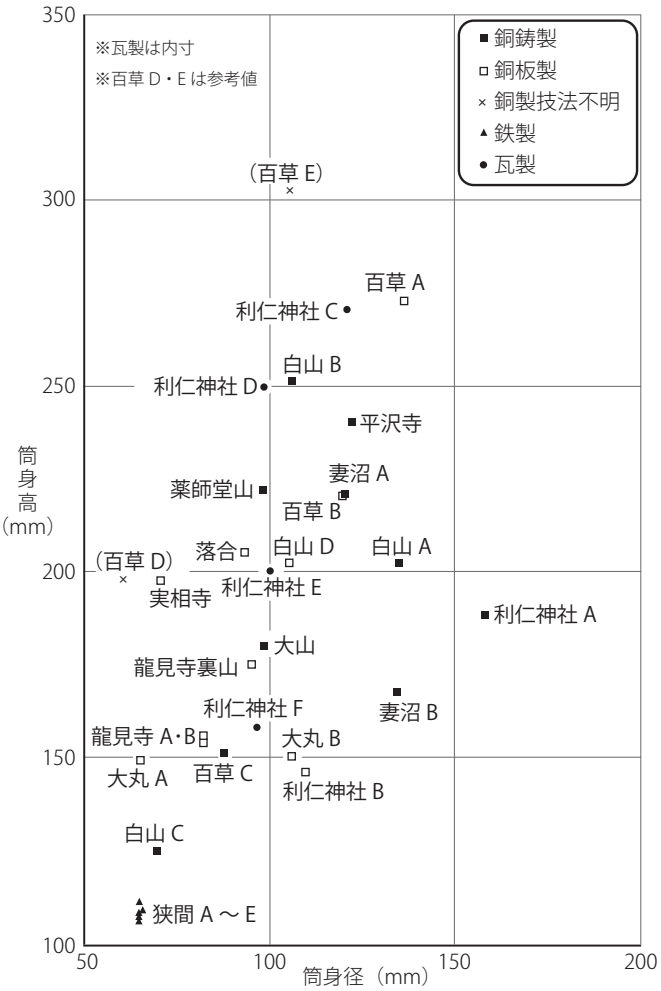

図８　武蔵出土経筒の寸法

経筒が出土している。偽銘と判断したC号および失われたD・E号については年紀不明のため厳密さを欠くが、少なくとも五回にわたって経典埋納の供養が行われたと推測される。

武蔵で複数の経筒が発見されているのは七か所で、妻沼経塚（熊谷市）で二口、利仁神社経塚（東松山市）で六口、狭間経塚（足立区）で五口、大丸経塚で二口、白山経塚（八王子市）で四口、宇津木台遺跡E地区（八王子市）二口、龍見寺経塚で四口であるから、百草経塚は利仁経塚に次ぎ、狭間経塚に並ぶ数の経筒が出土していることになる。それぞれの経塚で未発見の経筒が存在する可能性はあるものの、百草では一二世紀後半を前後する数十年間に経塚の造営が継続的に行われており、その規模は武蔵屈指であったとみてよさそうである。

再び経筒に目を向ければ、個性的な特徴を持つ製品が少なくないことにも気付く。

その最たるものが、A・B号経筒に付く舌状の留め具である。この留め具については、すでに林宏一が詳しく取り上げ、類例の提示も行っていて、百草A号経筒にも名を刻む「藤原守道」の手になるものであることが明らかにしている（林一九七五）。守道制作の経筒については次節で触れるが、百草A・B号経筒が武蔵において制作されたことは間違いあるまい。また、筒身に竹の節のような突線を持つC号経筒は、前述の通り東国の製品とみてよい。

一方、E号経筒は、銅鋳製の筒身を轆轤で薄く削り上げたものと推測した。蓋に八葉座の摘み有する点も含めて、東国での類例は少ない。失われているため想像の域を出ないが、E号経筒は近畿地方の製品ではなかろうか。檀越ないし勧進僧たちの近畿地方との結び付きが想定される。

（二）藤原守道の経筒

長寛元年銘の百草A号経筒が藤原守道の作品であることは、その刻銘から明らかである。そして、このA号経筒は、筒身と蓋に舌状の留め金具を備えている点に大きな特徴がある。A号の二年後の永万元年銘の百草B号経筒も同様の留め金具を備えている。

こうした舌状の留め具を持つ経筒は、僅かしか知られていない。一つは、筒身のほぼ中央に節を持つものとして紹介した秋田県別所山経塚出土品である。ただこれは銅鋳製である点、蓋にしか留め具が付かない点で百草A・B号とは異なる。

いま一つは、出土地不詳の長寛三年（一一六五）銘経筒である[19]（**図9**）。総高二〇・四チセン、径七・一チセンと細身の銅板製経筒で、筒身に留め具を装着する方法や、蓋の張出しが一体であることなど、百草A・B号と同じ細工である。しかも、筒身には次の刻銘があり、守道の製作であることが明らかである。

（筒身）

實相寺　住僧忠圓

長寛三年乙酉二月廿一日庚□

工藤原守道

舌状留め金具を有する銅板製経筒はこれら三口以外に見いだせない。このうち二口に「藤原守道」の名が制作者として記されているのだから、舌状留め具を有する経筒は守道の創意であり、守道の刻銘のない百草B号も彼の作品と推測できるのである。

守道制作の経筒がこの三口ばかりでないことも知られている（林一九七五）。埼玉県嵐山町平沢寺経塚出土品と府中市定光寺経塚出土品がそれである。平沢寺経塚出土品は、高さ二四〇ミリ、径一二二ミリの銅鋳

表２　藤原守道製作の経筒

出土・経筒名	紀年銘（西暦）	製作技法	舌状留め具	作者名
平沢寺経筒	久安４年２月29日（1148）	鋳銅製	無	藤原守道・藤原助貞・安部末恒
百草Ａ号経筒	長寛元年10月13日（1163）	銅板製	有	工匠藤原守道
出土地不明（実相寺経筒）	長寛３年２月21日（1165）	銅板製	有	工藤原守道
百草Ｂ号経筒	永万元年９月17日（1165）	銅板製	有	（無銘）
定光寺経筒	仁安２年２月21日（1167）	不明	不明	工藤原守道

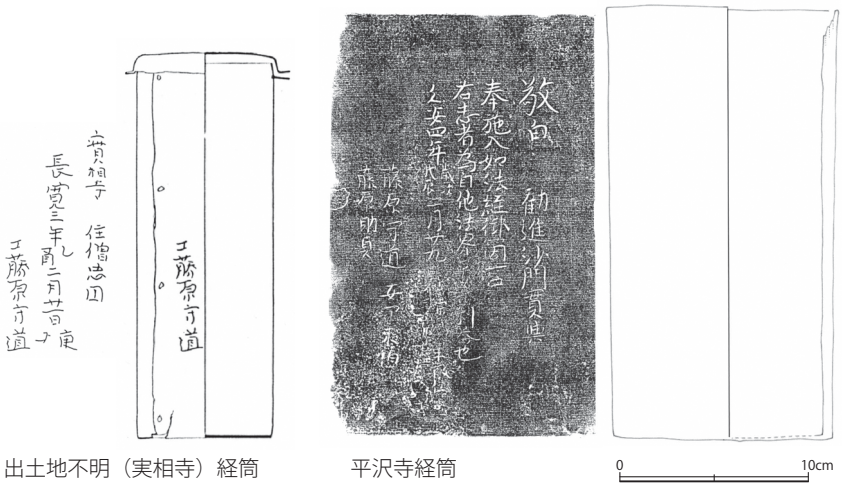

図９　平沢寺経筒・実相寺経筒
（平沢寺経筒＝水口 2004、実相寺経筒＝蔵田 1966 より転載）

製で、底部を含めて一鋳で製作されたものである（**図９**）。筒身に鏨で次によに銘文が陰刻されている。

（筒身）

敬白　勧進沙門實與

奉施入如法経御筒一口

右志者為自他法界平等利益也

久安四年歳次戊辰二月廿九日戊午

當國大主散位

平朝臣茲縄方縁等

藤原守道　安部末恒

藤原助貞

「當國大主散位平朝臣茲縄」は秩父重綱に比定され、守道は安部末恒、藤原助貞とともに末尾に記されている。「工匠」や「工」の肩書は付されていないが、この三名が経筒の製作に携わったのだと考えられている。また、本経筒は銅鋳製であるから守道らは鋳物師でもあったことになり、鋳物と銅細工を兼業する工人の活動を示している。

定光寺経塚出土品は今存在を確認できないが、いくつかの近世地誌に銘文が記録されている。『武蔵名勝図会』は銅筒の銘を「敬白僧智賢南閻浮提唱日本国武蔵州多波郡定光寺矣、大施主上生成恒、少施主藤原氏、工藤原守道、仁安二年歳次丁亥二月廿一日庚寅」と記録している。舌状の留め具の有無はおろか、銅板製か銅鋳製かも不明だが、守道の作品であることは明らかである。なお、この銘文のうち、「上生成恒」は壬生成恒の誤記とみて問題あるまい。

以上、守道の名を残すのは四口、守道の名を刻んでいないものの、舌状留め金具を持つことから彼の作品とみなせる百草Ｂ号をあわせると、計五口が守道の作品として確認できる[20]。このうち、銅板製であることの確実な三口すべてに舌状留め金具が設けられていることになる（**表２**）。その作品は百草、府中に集中するから、守道の活動拠点は多摩川中流域にあった可能性が高いといえよう。

（三）僧侶と檀越

次には百草出土経筒に刻まれた、守道以外の人物を見てみよう。ただし、E号経筒の銘は判読が困難なところがあり、原銘である保証もないため、対象とするのはA・B号である。

A号経筒には、長寛元年（一一六三）、弁豪という僧侶の勧めで玄久、観賢、定圓、陽久、定阿、尭尊、弁意らが結縁して、如法書写された法華経を収納したものである。「駈仕僧」という表現はほかに例がないが、文字通り薬西がその諸雑事を担ったのだろう。

彼らの素性は不明だが、弁―、―尊は天台系に多く見られる僧侶名といってよかろう。蹴彫された梵字の釈迦（バク）・阿閦（ウン）・弥勒（ユウ）・大日（ア）・文殊（アン）の五仏の構成も天台系に多く見られるという（林一九七五）。また、「弁」（弁豪・弁意）、「定」（定圓・定阿）、「久」（玄久・陽久）を通字とした同系譜と思われる僧侶名もあるから、弁豪の呼びかけに応じて、弟子や近しい関係にある僧侶たちが経典書写に参加した状況が想像される。A号には法華経八巻を納めていたことが明らかだから、弁豪と七人の結縁者が各一巻を書写したと推測することもできる。願意は不明ながら、平沢寺経筒にある「自他法界平等利益」のような作善が想定されよう。

B号経筒は、尭尊の勧めのもと、藤原氏と高橋貞列が檀越となって行われた。尭尊は、A号経筒に結縁者として名を連ねたその人である。A号経筒から二年後の永万元年に、今度は自らが勧進し、俗人の施主を得て経典埋納を行ったことになる。B号経筒はA号同様に藤原守道の製作と判断できるから、A号を造営した際の知己を頼ったものと考えてよかろう。

このB号経筒に壇越として刻まれているのが藤原氏と高橋貞列である。藤原氏は女施主、高橋貞列はその夫とみられるが、その素性ははっきりしない。しかし、守道製作の経筒のうち、平沢寺経筒に刻まれた「當國大主散位平朝臣茲縄」が秩父平氏の秩父重綱に相当することはまず間違いあるまい[21]（林一九七五）。定光寺経筒の壬生成恒は、あきる野市大悲願寺が蔵す治承五年（一一八一）の大般若経の施主として見える壬生末正の同族と考えられ、多摩の有力氏族に連なる人物と推測される（深澤一九九二）。また、守道は関わっていないけれども、八王子市の白山神社経塚は、無銘の経筒内に残された経巻から、小野氏と清原氏等を檀越として仁平四年（一一五四）に埋経されたことが判明する（八王子市史編集委員会編二〇一三ほか）。このうち小野氏は、後に武蔵七党の一つとして発展する横山党を形成する。これらの事例から、当期の経塚の造営を経済的に支えたのが国衙在庁や在地の領主層であったことがわかる。

ここで改めて守道の手になる他所出土の経筒を見ると、実相寺の住僧忠圓が、百草A号経筒の定圓と「圓」を通字としていることに気付く。守道と僧侶たちの緊密な関係は百草経塚にとどまらなかったといえよう。実は小野氏が檀越としてみえる白山神社経塚も、百草経塚と密接な関係を想定できる（深澤二〇一五ほか）。白山神社経塚は百草経塚の膝下を流れる大栗川をさかのぼり、中山の小谷の谷頭にある。大栗川よりも上流で多摩川に合流する浅川の水系との分水嶺に位置し、標高は一七〇㍍である。百草経塚とはおよそ七㌔しか離れていない。ここでは、文政九年（一八二六）を嚆矢に、一八八四年、一九二四年、一九七六年に経塚が発見されていて、あわせて銅製経筒四口、銅製経筒残片、経巻一〇巻、経筒を収納した陶製の円筒容器一口、甕二口、銅鏡九面、桧扇残片、刀子残片といった多彩な遺物が出土している。経筒に銘文はないものの、文政九年時に発見された銅鋳製経筒に収められていた法華経八

巻とその開経である無量義経、結経である観普賢経の計一〇巻が残されていて、その奥書により、この経筒を埋納した経緯が知られる。例えば、無量義経には、

無量義経
□□□書写為縁法界諸有情皆共成仏道
仁平四年甲戌九月十一日大勧進僧弁智
小野氏等　結縁者僧有阿
僧順応　清原氏等

観普賢経には、

大歳甲戌■西仁平四年九月廿日□許武蔵国西郡
船木田御庄内長隆寺許　西谷出写了
勧進僧弁智　結縁者僧忠尊
蓮意

とある（■は抹消文字）。巻によって若干記載内容は異なるが、これら奥書を総合すると、仁平四年（一一五四）九月、武蔵国西郡船木田庄の長隆寺の西谷において、僧弁智の勧進で有阿、順応、忠尊、蓮意が結縁し、小野氏並びに清原氏等を檀越として、経典の書写と埋納が行われたことがわかる。

ここで注目すべきは弁智、有阿、忠尊の三人が、百草経塚A号経筒の弁豪・弁意、定阿、尭尊とそれぞれ「弁」「阿」「尊」を通字としている点である。白山神社での経塚造営は百草A号の九年前にあたるから、彼らはそれぞれ同一の法統に属した、きわめて近しい関係にあったと推測される。さらに、上述の通り、百草経塚以外の守道製作経筒にまで目を向ければ、弁智は定光寺経筒の智賢と「智」を、忠尊は実相寺経筒の忠圓と「忠」を通字としている。

すでに百草経塚に関わった僧侶たちが天台系であった可能性の高いことは述べた。白山神社が天台系であることはいうまでもない。さらに、守道制作の経筒出土地をみると、平沢寺は現在真言宗だがもとは天台宗、定光寺も一四世紀には天台談議所として機能していたことが確認できる。

したがって、一二世紀の多摩川中流域における経塚造営は、天台系の僧侶たちが大きな役割を果たし、それと藤原守道という経筒製作者の活動が相俟って大きなムーブメントになったのだといえよう。天台系僧侶たちと守道の緊密な関係が経塚造営を推し進めたといってもよい。しかもそれは、わずか一〇数年の間に集中しているのである。

（四）百草経塚と真慈悲寺

前述の通り経筒が出土した二王塚は、東へ向かって伸びる丘陵の尾根の先端近くの高所にある。同所で石組み遺構が確認されたことで、経塚の位置はおおむね特定されたといってよい（図10）。

一方、仁王塚北側の小谷の谷頭近く、つまり近世に松連寺が営まれた地には、真慈悲寺が存在した。このことは、百草八幡神社所蔵の建長二年（一二五〇）の銅造阿弥陀如来坐像に「真慈悲寺」の名が刻まれていることによって十分推測できたが、隣接する百草園内（松連寺跡）から膨大な量の中世瓦が発掘されたことによって、まさにこの谷頭一帯に堂宇の存在を確実視できるようになった（日野市遺跡調査会編一九九三等）。さらに、この谷にはいくつかの平場があり、坊院の存在も推測されている（日野市郷土資料館編二〇一一等）。元禄三年（一六八九）の「百草村田畑屋敷検地帳」[22]にみえる「ほうぞう（宝蔵）・しんどう（新堂）」の字も、真慈悲寺に関わる堂舎の広がりを示している。九〇〇㍍ほどの谷戸に展開する中世寺院の姿を想像でき、百草経塚はその一画を占めるとみてよかろう。

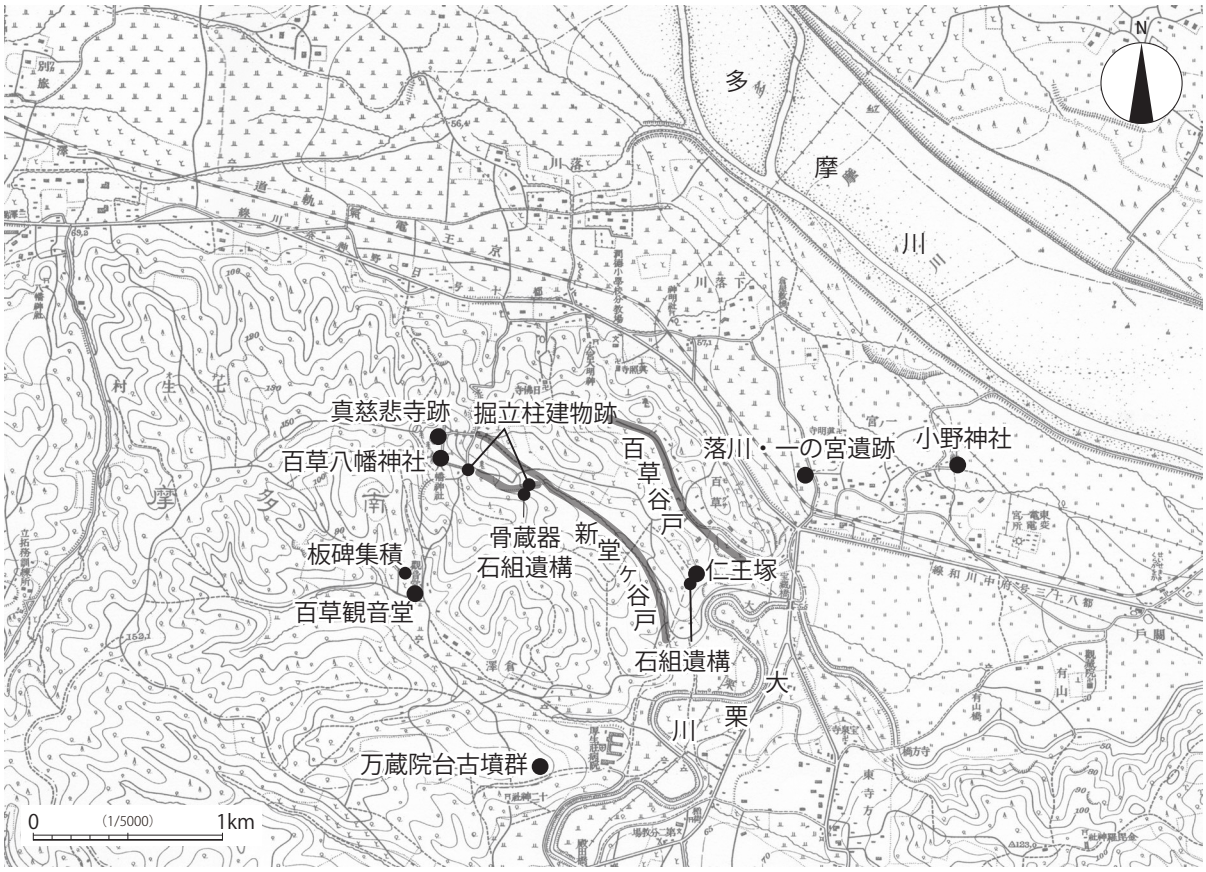

図 10　百草経塚周辺図（1940 年 4 月測図「高幡」に加筆）

真慈悲寺は、『吾妻鏡』文治二年（一一八六）二月三日条に「武蔵真慈悲寺者、御祈祷霊場也、然而未依無寄附庄園、仏無供具之備、僧失衣鉢之貯、爰僧有尋今日参上、安置一切経於当寺、可修理破壊之由、申請之間則所被補院主職也」とあるのが確実な初見である[23]。これに続いて建久三年（一一九二）五月八日には、鎌倉の勝長寿院で相模・武蔵の一六寺社の僧侶一〇五人が参集して催された後白河法皇の四十九日法要に三人を出席させている。ようするに、真慈悲寺はもともと一切経を蔵す祈祷の霊場であったが、頼朝によってその存在を認められて再興され、関東の主要寺社の仲間入りを果たし、おそらく関東祈祷所に列せられたのである（今野二〇〇七）。

したがって、百草経塚の多くは、御祈祷の霊場でありながら困窮していたと有尋が主張している時期に造営されたことになる。いささか辻褄が合わないように感じるが、困窮を声高に叫ぶことで庇護と一層の発展を狙ったのだとすれば不自然な主張とは言えない。また、御祈祷の霊場における経塚造営は矛盾しない。間接的ではあるが、百草経塚の出土品は『吾妻鏡』以前の真慈悲寺の存在を物語る資料として位置づけられる（峰岸一九九四ほか）。また、頼朝の援助を勝ち取った有尋は、白山神社経塚で結縁者として見える有阿と「有」を通字としていて、ここにも天台系僧侶の緊密な関係をうかがうことができそうである。

こうした真慈悲寺の存在を踏まえれば百草経塚の地は寺院の一角に設けられた聖地であり、真慈悲寺を拠点に活動していた僧侶たちこそ、百草経塚造営の担い手であったと考えて問題あるまい。当然、先に指摘した天台系僧侶たちと、藤原守道という経筒製作者のネットワークの中心にいたのは、真慈悲寺の僧侶たちであったと推測されよう。

ところで、百草の山からは多摩川対岸に武蔵国府を一望できるが、国府の側から見ると百草の二王塚付近は冬至の頃に陽が沈む山である。聖

地・霊場としてのロケーションを充分に備えていることはもちろんだが、そればかりでなく、国府と密接な関係を持つ霊場であったことをも推測させる。これは、真慈悲寺を特定の庇護者がいない祈祷の霊場という『吾妻鏡』の記述とも符合するのではないだろうか。だからこそ、文治二年には頼朝の援助を得て、さらには関東御祈祷所に名を連ねるまでに台頭するのであろう。

三　経塚の造営組織

以上の分析を踏まえ、百草経塚をはじめとする天台系僧侶たちが主体となった経塚の造営組織について言及しておきたい。

（一）藤原守道の組織

まずは、天台系僧侶たちとともに活動した藤原守道という経筒製作者の性格にもう少し踏み込んでみたい。

その際触れておかなければならないのは、稲村坦元編『武蔵史料銘記集』（稲村一九六六）が採録した定光寺経筒の銘文であろう。

敬白南閻浮提日本国武州多波郡定光寺僧智賢
大施主　壬生成恒
少施主　藤原氏
大　工　藤原守道
仁安二年歳次丁亥二月一日庚寅

稲村はこれを『多摩名勝図会』から採っている。内容に大きな違いはないが、『武蔵名勝図会』所載の銘文よりも、経筒銘として体裁が整っていることは明らかである。注意しなければならないのは、大施主を「壬生成恒」、藤原守道の肩書を「大工」としている点である。

これをもとに林は、長寛年間に「工匠」ないし「工」であった守道が仁安二年には「大工」に昇りつめていたと推測している（林一九七五）。しかしながら、現在、『多摩名勝図会』の存在は確認できていない。もともと『武蔵名勝図会』は多摩郡の記載で完結しているから、『多摩名勝図会』は同書の写本の一つであった可能性が高い。とすれば、書写の過程で経筒銘として体裁が整えられ、大施主である「上生成恒」は「壬生成恒」に改められたとするのが妥当だろう。守道の肩書「大工」に関しては不明というほかないが、その扱いには慎重さが求められると思う[24]。

こうした肩書はともかく、経筒に製作者名を明記した事例は全国で二〇数例しか知られていない。しかもそれは西国に集中し、関東以東では秋田県湯沢市出土の寿永三年（一一八四）銘銅板製経筒にみえる「大工草賀部国清」を除いて例はない。また、複数の経筒に名を残すのは、山口県で確認されている「雀部重吉」による二口くらいしかないようである[25]。「大工」の肩書には疑義を呈したが、確認できる最初の作品である平沢寺経筒において、守道は藤原助貞、安部末恒とともに名を刻んでおり、その記名順からすれば、優位な立場にあったとみてよいだろう。工房の主催者としての確固たる地位を築いていたからこそ、その後の作品にも自らの名を刻みえたと考えられる[26]。

それでは、多くの経筒製作に携わった守道はどんな組織に所属していたのだろうか。鋳物師は遍歴性が強く、とりわけ梵鐘の場合は河内丹南をはじめとする鋳物師たちの出吹きがよく知られている。しかし守道は、関東に特徴的にみられる一鋳式の経筒を平沢寺で製作し、その後、一九年にわたって作品を武蔵に残している。武蔵に本拠を置いているのは間違いない。

ただ、彼の性格をめぐっては、判断が難しい。守道の経筒を最初に

詳しく分析した林は、先に見たような天台系僧侶たちとの密接な関係を踏まえて、天台系の寺院組織下の工房に所属していたと考えた（林一九七五）。しかしその後、守道の配下ないし同一工房に連なると推測される鋳物師を見出し、見解を改めている。熊谷市聖天堂の建久八年（一一九七）銘金銅製錫杖に「鋳匠」の一人としてみえる「藤原守家」と、府中市善明寺の建長五年（一二五三）銘の鉄造阿弥陀如来坐像にみえる「大工藤原助近」がそれである。それぞれ「守」と「助」を通字としている点から、守道―守家と助貞―助近という二つの系譜を推測し、さらに先述した定光寺経筒と鉄造阿弥陀如来坐像にみえる「大工」の肩書が国衙機構の細工所に属した身分呼称にふさわしいと判断するのである（林一九八二）。

くどいようだが、定光寺経筒の「大工」に関しては信憑性に問題がある。加えて、助近が「大工」職を名乗った一三世紀中葉はすでに中世初頭とはいいがたい。助貞―助近の系譜は認められるものの、両者の間で工人をとりまく環境も大きく変貌していたとみるべきだろう。しかしそれでも、守道が活躍した一二世紀後半という年代を踏まえた時、林の考察には首肯できる点が少なくない。実際、同時期の武蔵国衙にも税所をはじめとした所が成立していたし[27]、何より、守道の作品が多摩川中流域すなわち府中近傍に集中する傾向があることは見逃せない。

その一方、守道が天台系の僧侶たちとともに経塚造営に力を注いだ点も、やはり等閑視するべきではないと思う。治承五年（一一八一）、鎌倉の鶴岡八幡宮寺の造営に浅草の大工が動員されている（『吾妻鏡』治承五年七月八日条）。浅草の大工とはすなわち浅草寺付属工人であろうから、一二世紀後半の武蔵において寺院に連なる職能集団が存在したことは間違いない。

以上を勘案して、国衙機構に連なる組織に属すという由緒を持ちながらも、天台系の寺院とも密接な関係を持ち多面的な活動をしたのが、守道であったと推測したい。

（二）経塚造営の実相

次に、天台系僧侶・藤原守道の連携による経塚の造営組織について、改めて取り上げてみる。

武蔵におけるこの時期の経塚造営には、二つのスタイルがあるとされている（水口二〇〇四など）。僧侶のみの場合と、僧侶の勧進で後に武士団を形成していくような在地領主層が檀越となる場合である。天台系僧侶と守道の連携による経塚の造営も、この二つの場合があった。ただ、白山神社経塚の一口が無銘ながら経典の奥書によって小野氏や清原氏の存在を知ることをできたように、経筒銘にみえないからといって、檀越不在で埋経されたと言い切ることはできない。むしろ、檀越の援助なくして埋経を実践することはむつかしく、経筒への檀越名の記載の仕方と有無は造営の主体性や願意などによって左右されたと考えるべきだろう。

これに関連して、守道が自らの作品のすべてに名を記していない点にも注意したい。独創的な経筒を制作し、自らの名を明記する一方、百草B号経筒には記していないのである。この違いは何だろうか。考えうるのは、守道が単に経筒製作者にとどまらない役割を担うこともあったということだろうか。

こうした点も含めて、守道と天台系僧侶の密接な関係は見逃せない。一二世紀中葉から後葉の経塚造営は、天台系寺院の積極的な活動のもとに行われ、その寺院組織に属す藤原守道が専ら経筒製作にあたる関係にあったのである。守道は、天台系寺院の宗教活動を常にサポートする関係にあったといってもよい。多摩地方の一二世紀における経塚の隆盛は、

まさに彼らが担った部分が少なくないのである。特定の宗教組織と結びついた工人の具体的な活動を知ることのできる希少な事例であり、経塚造営体制の一例として評価してよいと思われる。

もちろん、百草やその周辺の経塚造営の全てが守道の作品で賄われていたわけではない。想像の域を出ないけれども、E号経筒は京の製品と推測した。同じく、白山神社経塚にも京の製品と推測できる経筒が含まれていた。百草経塚に副納された秋草蝶鳥鏡や青白磁合子も京との交流をうかがわせる。経塚造営を進めた天台系僧侶たち、あるいは檀越たちの幅広いネットワークを示しているといってよいだろう。あるいは、こうした京の経筒は、京の住人による埋経の可能性もあるのではないだろうか。

つまり、ローカルなネットワークと、京を巻き込んだ広域なネットワークが相俟って、多摩川中流域という地域における経塚造営が隆盛したのであり、その核の一つが百草経塚であったといえよう。

おわりに

以上、百草経塚出土経筒のうち現存する三口の調査報告を兼ねて出土情報を整理し、関連する問題に言及した。しかし、出土情報はまちまちで、どこまで真実に近づけたのか心もとない。舌状の留め金具や藤原守道、それをとりまく諸問題に関しては、林宏一氏の先行研究に網羅されていて、氏の見解をトレースし、少しばかりこねくり回したにすぎない。こうした内容のため要約は控えたい。

それにしても、百草経塚と真慈悲寺をとりまく史資料は豊かである。本稿は経塚に主眼を置いたため、ほとんど言及しなかったが、真慈悲寺は一一世紀後半にまでさかのぼることが確認されており、一三世紀半ばと後半には瓦を用いた堂宇が建立されたことも明らかにされている。加えて、建長二年銘の阿弥陀如来坐像（百草八幡神社現蔵）もある。また、高幡山金剛寺現蔵の文永一〇年（一二七三）銘鰐口も、真慈悲寺の什物であったとする見解がある（金本一九九二）。もちろん、丘陵の森の中には遺跡そのものが埋もれていて、考古学的な情報はこれからも増加が期待される。歴史を繙く多くの可能性が残されているといってよい。さらに最近、真慈悲寺跡に隣接する百草八幡神社境内において、真慈悲寺跡出土品とは別種の瓦が新たに採集された。神社社殿に用いられたものとみられる。谷奥に仏堂と社殿が並び立つ景観を具体的に想像できると思う。研究のさらなる進展に期待したい。

註

1 『武蔵名勝図会』は、八王子千人同心組頭の植田孟縉の編集で文政三年（一八二〇）脱稿、文政六年に昌平坂学問所に献上されている。本稿では基本的に、慶友社刊本（片山校訂一九六七）を用いた。

2 『新編武蔵風土記稿』は幕府による官選地誌で、多摩郡の調査は八王子千人同心頭に命じられ、『武蔵名勝図会』を著した植田孟縉を含む七人の組頭によってまとめられている。調査の開始は文化一一年（一八一四）で、文政五年に稿本が提出されている。全巻の完成は文政一三年。本稿では、大日本地誌体系本（蘆田校訂・根本補訂一九九六）を用いた。

3 『江戸名所図会』は、斎藤幸雄・幸孝・幸成の三代にわたって書き継がれ、全巻の刊行は天保七年（一八三六）だが、本稿に関わる三巻

は天保五年に刊行されている。本稿ではちくま学芸文庫本（市古・鈴木校訂一九九六）を用いた。なお、幸孝による文化一二～一三年の調査記録である「郊遊漫録」（（斎藤）一九七四）には、三口の経筒の存在を記しているものの、これらを実見していないことが明記されている。『江戸名所図会』の百草経塚に関する記述は、他書を参照したものと推測される。

4 「調布日記」は、南畝が文化五年から六年にかけて多摩川流域の各地を巡視した際の紀行文。「玉川披砂」もこの時の著作の一つ。松連寺には六年二月二二日に訪れている。ともに『蜀山人全集』一（日本図書センター一九七九）を用いた。

5 ほぼ同内容の写本として『百草紀行』がある。『日野市史史料集　続地誌編』（日野市史編さん委員会編　一九九一）を用いた。

6 『多波の土産』は、江戸在住者による文化一一年八月の紀行文。『日野市史史料集　続地誌編』（日野市史編さん委員会編　一九九一）を用いた。

7 西尾市岩瀬文庫所蔵の巻子本。記載内容から文化一三年以降の成立とわかる。

8 『藁畏』は、武蔵総社文庫（大國魂神社所蔵）の一書。府中市郷土の森博物館架蔵の複写による。当部分は文政七年（一八二四）の記載である。なお、山崎美成の『海録』（国書刊行会一九一五）にも春登から聞いた話としてほぼ同文が記載されている。

9 『往昔夜話』は、天保十四年、内藤重鎮が祖父・重喬の昔語りを書き留めたもの（府中市教委編　一九九八）。

10 「伝紀」は『東京都日野市百草観音堂および百草八幡神社の文化財調査報告書』（日野市郷土資料館編二〇一四）に写真とともに翻刻及び読み下しが掲載されている。ここでは、本稿に直接かかわる部分を示しておく。

（前略）果シテ去ル歳元禄十有三庚辰歳幸縁有リテ此百草村松連寺ニ移住スルハ正八幡太神ノ神祐ニ依ラン。始メテ夢感ヲ信ジ唐捐テザレバ是ニ霊夢有リ。且ツ夫レ雨余彼ノ許ニ気象有ル如シ。乃チ里人ヲ誘引シテ夢ニ随ヒ気ニ随ヒテ此ヲ穿チ彼ヲ掘ル。神社ノ後所ヲ穿チテ男山ノ土入磁器ヲ得ル。次イデ一鑑ヲ得又其ノ次ニ千手観音の銅像ヲ得ル。或ハ百余ノ短刀有リ或ハ法華奉納銅筒三箇ヲ得リ。其銘歴々建久日本幕下之彫字長寛年中ノ記文永万暦ノ楷字等皆古代ノ風今猶存ス。其侘磁器仏具等出デ郷人駭キ視ル。（後略）。百草八幡神社所蔵。

11 「畧縁起」は個人蔵（日野市郷土資料館編　二〇一四）。

12 高さ三・四㍍の圭頭形で、八代住職・魯庵の功績を顕彰する目的で建立された。碑文は全文漢文で難解だが、真慈悲寺調査の会による翻刻と読下しがある（真慈悲寺調査の会編二〇〇七）。

13 『考古界』一―四の彙報に掲載された「考古的探検旅行」（（記者）一九〇一）。国分寺・府中・百草などの見学記で、府中善明寺の建長五年銘の鉄仏とともに、百草経塚の経筒の見学が主たる目的であった。

14 ついでながら、これら五口の経筒の所蔵場所の移動について、知れるところをまとめておく。『多波の土産』の作者は松連寺において五口の経筒を拝観しているから、文政一一年の時点で寺が保有していたことは間違いない。慈岳山松連寺は一八七三年の廃仏毀釈で廃寺に追い込まれた。この影響であろう、A～C号経筒は一九〇一年には金剛寺に収められ、その一方、D号はこの時点で地元の茶店に預けられていたことが「旅行」によって判明する。この時点ですでにE号の行方は不明となる。その後、A・B号は奈良国立博物館所蔵、

C号は同館寄託となっている。D・E号は所在不明となる。なお、D・E号の存在を明記した記録がわずかしかない理由ははっきりしないが、記録者が偽銘であるため採録しなかったか、あるいは寺僧らが偽銘に後ろめたさを感じて拝観を自制した可能性があるのではないだろうか。

15 『武蔵名勝図会』は、元禄一三年、二王塚での出土とする一方、二王塚を紹介する本文では文化一四年に宝物が掘り出されたとも述べている。錯誤であろうか。

16 鏇本孔のある鉄刀、六窓の鍔、鉄鏃の写生図からすると、これらは後期古墳の副葬品と判断でき、このうち鉄刀二口と鍔は百草八幡神社所蔵として現存している。仁王塚の南方は万蔵院台古墳群が確認されており、仁王塚至近にも後期の石室墳が存在した可能性が高い（持田二〇一四）。

17 東電学園は東京電力の職業訓練施設で、現在は東京電力総合研修センターが残る。

18 松連寺に隣接する百草八幡には銅造の阿弥陀如来坐像が伝わり、その背面に刻まれた銘文から、建長二年（一二五〇）に真慈悲寺に納められたことがわかる。真慈悲寺は、これをさかのぼって『吾妻鏡』の文治二年（一一八六）二月三日条と建久三年（一一九二）五月八日条でも確認できる南武蔵の有力寺院である。中世のうちに廃寺となり、所在も定かではなくなったようだが、阿弥陀如来坐像の存在を踏まえれば、当然、至近に真慈悲寺が存在したという想定は容易にできたはずである。にもかかわらず、「伝紀」は真慈悲寺のことに一切触れていない。また、百草C・D号経筒の偽銘では百草丘陵北東にある一宮（小野神社）の別当と位置づけることで正統さを主張しようとしているが、これも真慈悲寺の存在を考慮していない。両者に共通するのは、真慈悲寺の存在を無視して、八幡宮や松連寺の開創を古く位置づけようとする意図にほかならない。

19 出土地不詳だが、銘文にある「実相寺」を採って、実相寺経塚と呼んでおく。本経筒については、大田区池上本門寺境内との伝承を持つと報告した文献があり（林一九七五、東京国立博物館編一九八八など）、実際、本門寺に隣接して実相寺が存在する。しかしながら、この実相寺は天文一九年（一五五〇）の開創で、しかも一九二二年に至って現在地に移転したのだという。出土の伝承は俄には信じがたく、付会の可能性が高い（深澤一九九二）。

20 旧稿（深澤二〇〇七）では、環状金具が付く点から、D号を守道の製品と推測した。しかし、銅鋳製だとすればその根拠は失われるので、ここで撤回しておく。

21 「當國大主散位平朝臣茲縄」に続いて「芳縁等」とあるから、檀越は重綱の妻等とみるべきである。水口由紀子は亡くなった重綱の法要に伴う埋経という魅力的な考えを提示している（水口二〇一七）。しかし、この部分が割書きされ、守道以下三名よりも小さく刻まれている理由は不明というほかない。

22 峰岸純夫が検地帳記載の百草の地名を整理している（峰岸一九九六）。

23 高野山西南院所蔵の承暦三年（一〇七九）「聖閻漫徳迦威怒王立成大神験念誦法」（平安遺文四〇一号）の奥書にみえる「真慈悲寺」が、同寺にあたるとする指摘がある（清野一九九六）。この指摘はさらに深められていて、この「真慈悲寺」が『吾妻鏡』や阿弥陀如来坐像の背銘にみえる真慈悲寺が同一である蓋然性は高められている（澤田・田中二〇一八、峰岸二〇一八）。その場合、一一世紀後半段階の真慈悲寺は真言系であった可能性が生じるが、両密を兼ねた霊場で

あったと考えることもできる。

24 『武蔵名勝図会』は植田孟縉自筆稿本が残されているが、『多摩名勝図会』のような記載はない。写本である内閣文庫本、早稲田大学図書館本を実見したが、大きく異なることもない。そもそも、定光寺経筒は渋谷の祥雲寺の所蔵となっていたため、植田自身実見していないようである。また、文政七年（一八二四）刊行の『武蔵名所考 夏』も定光寺経筒の銘を載せるが、『武蔵名勝図会』と同文といってよい。

25 山口県出土の寛治七年（一〇九三）銘経筒に「雀部重吉」、康和四年（一一〇二）銘経筒に「鋳師雀部重吉」の銘が確認できる。ともに銅鋳製である。また、佐賀県仏法堤経塚出土の嘉保三年（一〇九六）銘経筒は、筑前大宰府の観世音寺の僧侶「鋳師僧永源」の作品で、九州北部に一〇数例が確認されている同型の経筒（四王寺型経筒）も永源ないし彼の工房の製作と考えられている（杉山一九九四）。

26 本経筒は檀越名を「當國大主散位平朝臣茲縄方縁等」と割書きするのに対して、守道をはじめとする三名の名は大きく刻まれている。また、守道ら三名には製作者であることを示す肩書がない。守道らを経筒製作者と判断するのは、百草A号経筒、実相寺経筒、定光寺経筒に「工匠」ないし「工」の肩書が付されているからに他ならない。想像の域を出ないが、守道らは結縁者であった可能性もあると思う。

27 嘉応元年（一一六九）の税所注進状（平安遺文 補二四一）。

参考文献

阿久津久　一九八五　「門毛経塚遺物と中世陶器」『茨城県立歴史館報』一三

蘆田伊人校訂・根本誠二補訂　一九九六　『大日本地誌体系 新編武蔵風土記稿』五　雄山閣

網野義彦　一九八三　「中世の鉄器生産と流通」『講座・日本技術の社会史 五 採鉱と冶金』日本評論社

市古夏生・鈴木健一校訂　一九九六　『新訂 江戸名所図会 三』筑摩書房

稲村坦元編　一九六六　『武蔵史料銘記集』東京堂出版

上野さだ子　二〇一〇　「松連寺の建立はいつか」『幻の真慈悲寺を追い求めて』日野市郷土資料館

片山迪夫校訂　一九六七　『武蔵名勝図会』慶友社

金本展尚　一九九二　「中世前期における多摩川中流域―高幡山金剛寺の周辺―」『都と鄙の中世史』吉川弘文館

（記者）　一九〇一　「考古的探検旅行」『考古界』一―四　考古学会

清野利明　一九九六　「真慈悲寺の淵源を探る（上）平安遺文四一〇号文書を中心として」『日野の歴史と文化』四三　日野市史談会

蔵田　蔵　一九六三～六六　「経塚論 一～一四」『ＭＵＳＥＵＭ』一四七～一八四　東京国立博物館

国書刊行会　一九一五　『海録』

今野慶信　二〇〇七　「関東御祈祷所について」『シンポジウム 幻の真慈悲寺を追う』多摩地域史研究会

（斎藤幸雄）　一九七四　『江戸地誌叢書七　郊遊漫録』有峰書店

澤田輝男・田中誠　二〇一八　「『聖閻曼徳鈴威怒王立成大神験念誦法』と真慈悲寺」『幻の真慈悲寺を追い求めてVol.2』日野市郷土資料館

真慈悲寺調査の会編　二〇〇七　『松連禅寺の碑』日野市郷土資料館

杉山　洋　一九八三　「熊野三山の経塚」『奈良国立文化財研究所創立三〇周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎

杉山　洋　一九九四　『浄土への祈り』雄山閣出版
関　秀夫　一九八五　『経塚遺文』東京堂出版
高橋健自　一九〇七　「経塚沿革考」『考古界』六―八　考古学会
竹内理三編　一九六一　『平安遺文一〇』東京堂出版
谷　春雄　一九七五　「百草松連寺私考」『日野の歴史と文化』八　日野史談会
多摩の古代・中世を考える会編　一九九三　『真慈悲寺の研究』
東京国立博物館編　一九八八　『経塚―関東とその周辺』
東京国立博物館編　二〇一七　『東京国立博物館図版目録　経塚遺物篇（東日本）新訂』
東京国立博物館編　二〇一八　『東京国立博物館図版目録　経塚遺物篇（西日本）新訂』
奈良国立博物館編　一九九一　『奈良国立博物館蔵品図版目録　考古篇　経塚遺物』
日本図書センター　一九七九　『蜀山人全集　一』
八王子市史編集委員会編　二〇一三　『新八王子市史　資料編一　原始・古代』八王子市
林　宏一　一九七五　「藤原守道の経筒」『埼玉県立博物館紀要』一
林　宏一　一九八二　「藤原守道とその系譜」『埼玉県史研究』九
日野市史編さん委員会編　一九七七　『日野市史史料集　地誌編』
日野市史編さん委員会編　一九九一　『日野市史史料集　続地誌編』
日野市遺跡調査会編　一九九三　『京王百草園の発掘調査―幻の真慈悲寺を探る―』日野市埋蔵文化財発掘調査報告一四　京王帝都電鉄
日野市遺跡調査会編　一九九八　『京王百草園内三棟庵移築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の発掘調査』日野市埋蔵文化財発掘調査報告五七　京王帝都電鉄
日野市郷土資料館編　二〇一一　『第二回幻の真慈悲寺を追って特別展「真慈悲寺と百草観音堂」』
日野市郷土資料館編　二〇一三　『武州多西吉富　真慈悲寺推定地出土の中世瓦』
日野市郷土資料館編　二〇一四　『東京都日野市百草観音堂および百草八幡神社の文化財調査報告書』
日野市郷土資料館編　二〇一七　『東京都日野市仁王塚遺跡―幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクトに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（一）―』
府中市教育委員会編　一九九八　『府中市教育史　資料編一』
深澤靖幸　一九九二　「武蔵府中定光寺とその周辺」『府中市郷土の森紀要』五
深澤靖幸　二〇〇七　「経筒と瓦からみた真慈悲寺」『シンポジウム　幻の真慈悲寺を追う』多摩地域史研究会
深澤靖幸　二〇一五　「文化をまとめ、生きようとした時代」『新八王子市史　通史編1　原始・古代』八王子市
細谷勘資　一九九二　「八王子市白山神社経塚出土の経巻について」『八王子の歴史と文化』四　八王子市郷土資料館
水口由紀子　二〇〇四　「埋経遺跡が語る十二世紀の南関東」『中世東国の世界二　南関東』高志書院
水口由紀子　二〇〇八　「武蔵武士と経塚」『東国武士と中世寺院』高志書院
水口由紀子　二〇〇九　「東松山市利仁神社経塚出土遺物について」『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要』三
水口由紀子　二〇一七　「平沢寺跡出土経筒の銘文について」『埼玉県立

史跡の博物館紀要』一〇
水越正義　一九〇一　「武蔵国南多摩郡七生村百草園」『史学界』三―二　史学会事務所
峰岸純夫　一九九四　「日野市の荘園と公領」『日野市史　通史編二（上）』日野市史編さん委員会
峰岸純夫　一九九六　「百草の地名」『日野の歴史と文化』四三　日野市史談会
峰岸純夫　二〇一八　「祈祷の霊場武蔵真慈悲寺」『幻の真慈悲寺を追い求めてVol.2』日野市郷土資料館
村木二郎　一九九八a　「九州の経塚造営体制」『古文化談叢』四〇　九州古文化研究会
村木二郎　一九九八b　「近畿の経塚」『史林』八一―二　史学研究会
村木二郎　二〇〇三　「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇八　国立歴史民俗博物館
村木二郎　二〇一五　「一鋳式経筒の新資料と鋳造技術」『中世を終わらせた「生命革命」―量産技術の広がりと影響―』平成二三年度～二六年度科学研究費助成金（基盤研究（B）研究成果報告書）
持田大輔　二〇一四　「日野市百草八幡神社伝来の古刀および鍔について」『東京都日野市百草観音堂および百草八幡神社の文化財調査報告書』日野市郷土資料館
森嶋　稔　一九八一　「信濃の経塚資料にみる二、三の問題」『信濃』三三―一二　信濃史学会

謝　辞

百草経塚の三口の経筒の調査は、二〇一六年に叶った。日野市郷土資料館の特別展「幻の真慈悲寺を追う」で里帰りし、同館の尽力により、奈良国立博物館ならびに所蔵者の了解を得られたことによる。また、調査と本書への掲載にあたっては、清野利明、小黒恵子、高橋秀之の諸氏のお手を煩わせました。ここに厚くお礼申し上げます。

写真２　百草Ａ号経筒

写真１　百草Ａ・Ｂ・Ｃ号経筒

写真４　百草Ｃ号経筒

写真３　百草Ｂ号経筒

写真６　百草Ａ号経筒 筒身舌状金具

写真５　百草Ａ号経筒
銘文（部分）

写真８　百草Ｃ号経筒　筒身内面

写真９　百草Ｃ号経筒　筒身底部

写真７　百草Ｂ号経筒　筒身内面

日野市ふるさと文化財課紀要　第１号

令和５年３月31日発行

編集・発行　日野市ふるさと文化財課

〒191-0016　東京都日野市神明4-16-1
Tel：042-583-5100　Fax：042-584-5224
Mail：bunkazai@city.hino.lg.jp